西南学院大学博物館秋季特別展

キリシタン考古学の世界

――今日に甦る祈りとさげび――

西南学院大学博物館秋季特別展

キリシタン考古学の世界

――今日に甦る祈りとさげび――

西南学院大学博物館

西南学院大学

ごあいさつ

本学博物館では建学の精神に従い、キリスト教に関する調査研究、とりわけ九州におけるキリスト教文化について取り上げてきました。それらを九州のキリスト教シリーズとして開催し、これまで島原・大分・天草を対象として、各地に根付いていたキリスト教文化を紹介してきました。これにより、禁教下における信仰形態のあり方、地域のなかのキリスト教文化の実相についても明らかになってきました。

近年、考古学界において、キリシタン墓地の発掘調査やメダイなどのキリシタン遺物の検出が相次いでおり、キリシタン分野に対する関心が高まってきております。各自治体には発掘されたキリシタン遺物が数多く蓄積され、キリシタン考古学という分野も確立してきています。これまで文献でアプローチされてきたキリシタン研究は、考古学の成果によって、いっそう深みを増してきております。

そこで本特別展では、本学博物館が取り組んできたキリシタン研究のなかから、考古学に焦点をあててみました。フランシスコ・ザビエルの来航以降、地域にさまざまな形でキリスト教は伝わり、信仰されていました。その後、禁教下においてもその教えは密かに守り継がれ、特有の信仰が生まれました。当時のキリシタン信仰の姿のリアルな部分を考古学の成果に従って紹介するとともに、キリスト教を受け入れる土壌を中世以降築いていった海外交流についても取り上げています。

なお、本特別展は一般社団法人日本考古学協会2012年度福岡大会が本学で開催されることにあたり、多数の方々にキリシタン考古学研究の現状をご理解していただけますように企画いたしました。特別展開催にあたり、ご協力賜りました関係各位に対しまして衷心より御礼申し上げます。

2012年10月19日

西南学院大学博物館

館長　高倉 洋彰

開催概要

九州県内にはフランシスコ・ザビエルを起源とするキリスト教文化が根付いていた。これらの地域には、特に熱心なキリスト教信者がおり、彼らによる確実な信仰の姿があった。これまでになかった思想の訪れは彼らの精神性にも変化をもたらしていた。

しかし、キリスト教の伝播は長くは続かなかった。布教に続いて信仰が禁じられたことは、大きな転換期となった。こうしたなかでも彼らはひそかに教えを守り継ぎ、最終的には島原・天草一揆という形となって表出した。原城を舞台に繰り広げられた攻防は、今日の発掘成果からも生々しい姿が浮き彫りとなっている。

島原・天草一揆によって、キリスト教の信仰は絶対的に禁止された。しかし、彼らのなかには形を変えながらも信仰を守ろうとしたものたちがいた。彼らがキリスト教を受容した背景には、中世以来からの海外交流の蓄積があった。

本展覧会では、キリスト教受容の背景から、信仰の証を紹介するとともに、キリシタンにとっても一画期となった島原・天草一揆における戦闘の実像について取り上げる。また、信仰の背景にあった中世における海外交易を博多・大分・島原・天草からの事例をもとに、キリスト教文化の地域との関連を見出していきたい。

会　期：2012(平成24)年10月19日(金) ～ 12月15日(土)
主　催：西南学院大学博物館
共　催：一般社団法人 日本考古学協会

目　　次

ごあいさつ
西南学院大学博物館　館長　　髙倉　洋彰　2

開催概要　3
目次・凡例　4

本編
序．キリシタン時代の諸相　5
Ⅰ．信仰の足跡　6
Ⅱ．島原・天草一揆の痕跡　16
Ⅲ．途絶えなかった祈り　24
Ⅳ．海外交易の姿　27

寄稿　日本におけるキリシタン墓碑の様相
長崎歴史文化博物館研究グループリーダー　　大石　一久　36
原城出土のキリシタン資料
南島原市教育委員会文化財課　課長　　松本　慎二　40
「天草・島原の乱手負討死一件」にみる原城攻防と藩認識
西南学院大学博物館　学芸員　　安髙　啓明　47

出品目録　50

凡例

◎本図録は西南学院大学博物館秋季特別展「キリシタン考古学の世界」[会期：2012（平成24）年10月19日（金）～12月15日（土）]開催にあたり作成したものである。
◎図版番号は出品目録番号に対応するが展示順番とは必ずしも一致しない。
◎本図録に掲載している写真は各所蔵先の許可なく転載・複写することを認めない。
◎本図録の資料解説および全体編集は安髙啓明（本学博物館学芸員）がおこなった。
特別展関連キリシタン考古学資料所在地図は中尾祐太（本学博物館臨時職員・本学大学院国際文化研究科博士後期課程）が作成した。
◎編集補助については、貞清世里（本学博物館臨時職員・本学大学院国際文化研究科博士後期課程）・髙橋幸作（同上）・中尾祐太（同上）・阿比留由佳（本学博物館臨時職員・本学大学院国際文化研究科研究生）・稲益あゆみ（本学博物館臨時職員・本学大学院国際文化研究科博士前期課程）・吉松由希（同上）があたった。なお、翻訳については本学大学院を修了した中松沙織氏のご協力を得た。

序章 | キリシタン時代の諸相

1. 肥前国慶長国絵図

松浦史料博物館

江戸幕府は体制確立にあたり、国内情勢を把握する必要性に直面し、諸藩に国絵図の作成を命じた。これをうけて、1604(慶長9)年から開始された事業で、幕府へ提出されたものを慶長国絵図といい、その控えが本資料であろう。この頃は、島原・天草一揆前のいわゆる“キリシタン時代”のものであり、特にキリスト教が定着していた肥前国を描いたものである。天草諸島までを含んで描かれ、石高なども記されている。

Map of Hizen Province

I章 信仰の足跡

I -1.祈りの証

キリスト教を受容していったキリシタンたちには、心の拠り所としているものがあった。そのひとつがメダイ(メダリオン)であり、キリスト教に関係する図像を鋳込んだメダイにはキリスト教への強い想いが込められ国産化されるほどになった。これはまさに信仰の証そのものだった。

2. 府内病院想定復元模型

大分県立歴史博物館

1551(天文20)年8月、大友義鎮がフランシスコ・ザビエルを大分に招聘したことが、大分とキリスト教との接点である。その翌年にはバルテザル=ガゴが派遣され、布教活動がおこなわれている。ガゴ神父は、コスメ=デ=トルレスの指導を受けて、1553(天文22)年、顕徳町に教会を建てて布教活動の拠点とした。あわせて、外科などの西洋医学がほどこされ、1557(弘治3)年には、アルメイダが院長となり、日本初の洋式入院設備を整えた病院として多くの患者を診察した。

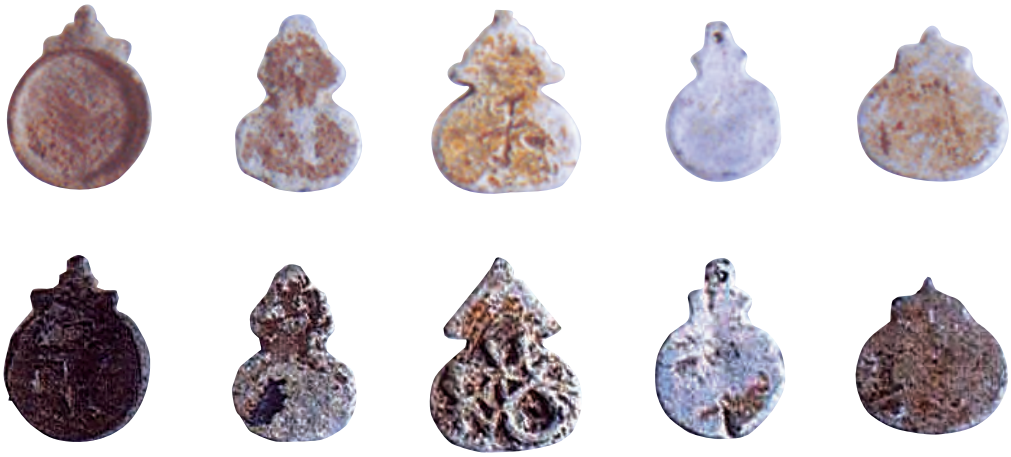
Miniature of Funai Hospital

3. メダリオン

天草市指定文化財
天草市立天草キリシタン館

ヨーロッパ製をもとに17世紀初頭に天草で作られた銅製楕円形のメダリオン。表裏には「ラ・ストルタにおける聖イグナチオ」と、「無原罪の聖母」が鋳込まれている。聖母マリアが三日月のうえで合掌して立ち、そして光を帯びた姿は「無原罪の御宿」をよく表現している。天草でも教理を理解してメダイが製造されていたことを示し、天草がキリスト教布教の拠点となっていたことを裏付けるものである。

Medal



4. メダイ（府内型）

大分県教育庁埋蔵文化財センター

メダイにはさまざまな形状がある。丸型、楕円形などはその一種であるが、本資料のように瓢箪やナスのような形のものもある。これらを総称して「府内型」と呼び、大分では約30例ほどが確認されている。ナスの形のものは博多で一例のみが確認されていることを考えれば、府内で大量に作られていたものと推測できる。これらのメダイ本体上部には、紐を通す部分も作られていることもわかる。

Medal

5. メダイ

大分県教育庁埋蔵文化財センター

大分にもキリスト教が根付いていたことを示す資料のひとつがメダイである。メダイは信仰の拠り所としてカトリック信者や聖職者が身につけていたもので、キリスト教布教にともなって日本にももたらされた。このメダイの表裏には聖母マリアがイエス・キリストを抱く「聖母子」と「ヴェロニカ(聖顔布)」が鋳込まれている。大分領内の府内町で製作されたものとされ、鉛を主成分としている。

Medal

6. メダイ

熊本県重要有形民俗文化財
天草市立天草ロザリオ館

キリシタンたちが信仰の拠り所としていたものがメダイである。このメダイは天草に伝わるもので、天草には1566(永禄9)年にアルメイダ神父が訪れ、キリスト教を伝えたが、その足跡を今日に残す資料といえる。両資料ともヴェロニカ(聖顔布)の図像と思われ、キリストを正面にした上半身が鋳込まれている。

Medal

7. メダイ

福岡市指定文化財
福岡市埋蔵文化財センター

博多遺跡群で出土したメダイ。表裏にイエス・キリストと聖母マリアが鋳込まれているメダイ（画像左）。そしてなすび型のメダイ（画像右）の2例が博多で発掘されている。

Medal

8. メダイ鋳型

福岡市指定文化財
福岡市埋蔵文化財センター

メダイと十字架の鋳型も博多遺跡群で出土している。これは博多でメダイと十字架が製造されていたことを示すものであり、国産化されたメダイと十字架の実相がわかる。なお、欠損しているが楕円形のメダイであったことが推測される。

Mold of medal

9. メダイ

北九州市指定有形文化財
北九州市教育委員会

黒崎城が築かれていた層から出土したメダイで、表裏にイエス・キリストと聖母マリアが鋳込まれている。黒崎城は1615年の一国一城令をうけて壊されたあと、長崎街道の宿場として生まれかわった。形状は楕円形で、主成分は、錫と鉛の合金である。ふちにバリの部分が残っており未完成品と思われる。

Medal

10. コンタ

大分県教育庁埋蔵文化財センター

ロザリオ(数珠)を構成するひとつひとつの珠をコンタ(コンタツ)という。ロザリオは「ロザリオの祈り」の繰り返しを数えるために作られた。この資料は府内町で製作されたもので、これ以外にも透明色と青色のガラス製が発掘されている。

Contas[Rosary]

11. コンタ

久留米市埋蔵文化財センター

久留米城下町遺跡から出土した遺物。ロザリオを構成する単体をコンタといい、複数形にしてコンタツと呼ぶ地域もある。このコンタは白乳色で四分の一程を残して破損しているが、他の地域でも出土しているような花形をした円形状だったことがわかる。

Contas[Rosary]

12. クルスの掛鎖

大分県教育庁埋蔵文化財センター

金属の細い線をS字状に曲げてつないだもの。先端にクルスなどをかけていた可能性もある。同じく府内町跡からも発見されている。

Cross chain

13. 指輪

南島原市教育委員会

原城跡から出土した指輪。左の資料は扁平状、右は2連の環の組み合わせでねじってある。簡素ながらも指輪を意識して作られていることがわかる。原城跡から出土していることからキリシタン一揆勢が身につけていたものと想定されるが、今後その確証作業が待たれる。

Ring

14. 指輪

大分県教育庁埋蔵文化財センター

全体的に細かな刻み目がほどこされているもので、二重に針金状のものを巻いている。金属は錫と鉛の合金で、二重の環に長方形の台が接着されている。あきらかに指輪を意識して作製されている。支倉常長の肖像画で指輪をつけている姿が描かれているように、宣教師かキリシタンが身につけていたのではないかともいわれる。

Ring

Ⅰ-2.意匠に込めたもの

キリシタンたちは当時のキリスト教信仰の証をモノで表現している。そのひとつに瓦があり、十字架をモチーフにしたものが、九州各地で発掘されている。なかには、大名居城で発掘されているものもあり、文献からは伝わらない当時のキリシタン意匠を知ることができる。

15. 花十字紋瓦

南島原市教育委員会

原城跡出土遺物。十字の四方の先端部が花ビラ状に開いた模様を「花十字」という。キリスト教関連施設の屋根瓦などでよく見られる様式である。花十字紋瓦は長崎市を中心に出土している。原城は有馬貴純が築いたが、大名居城から出土している点は見逃せない。

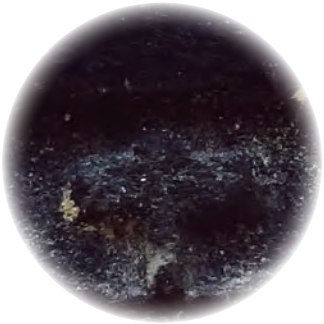
Roof tile with "flower cross" design

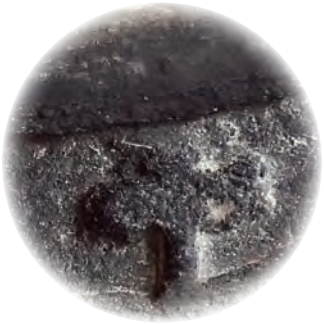
16. 罪標付十字架浮文軒丸瓦

朝倉市教育委員会

秋月城跡から出土した軒丸瓦。福岡藩の支藩だった秋月には、多くのキリシタンがいたことでも知られる。また、秋月を治めた黒田直之も熱心なキリシタンであった。本資料は大名居城に使われていた軒丸瓦で、波状のカルワリオ(ゴルゴダ・カルバリー)に罪標付十字架が立てられた意匠である。

Eave-end roof tile / Round-shaped roof tile with cross design





17. 十字浮文軒平瓦（久留米城下町遺跡2次）

久留米市埋蔵文化財センター

久留米城下町遺跡からの出土遺物。中央に十字を配した軒平瓦である。久留米城主小早川秀包は妻（大友宗麟の娘）とともに熱心なキリスト教信者だった。久留米は伴天連追放令が出された後も多くのキリシタンを庇護していた地域であり、これはその様子を伝える遺物といえよう。

Eave-end roof tile / Round-shaped roof tile with cross design

Ⅰ-3.信仰の果てに

キリスト教の信仰が自由だった、いわゆる「キリシタン時代」には、埋葬される墓にもキリスト教様式がとられている。また、礼拝用の石造物もあり、ここには花十字紋やローマ字などが刻まれていた。当時からすれば、一線を画す様式だったことはいうまでもない。現世はもとより、死後においてもキリシタンとして生き続けようとする彼らの信仰心が見受けられる。

18.「ＩＮＲＩ」銘入り石製十字架

波佐見町教育委員会

四面に罪標十字架を表現した初期キリシタン時代の石造物で、石幅の広い十字架には「INRI」と刻まれている。すべての面が線刻で表現され、一面にはカルワリオを意識した方形が刻まれている。墓碑というよりは礼拝用と思われる。

Stone cross with an inscription of "INRI"

19. 石製台付十字架

唐津市教育委員会

自然石の表面に、台形状のカルワリオとラテン十字架が彫られている。十字架の横木両端と縦木頭頂部は花頭状に表現されている。銘文はみられないが、石の先端部には穴がある。礼拝用として使われていたものと思われる。

Cross with stone pedestal

秋月城跡出土軒丸瓦

20. 【拓本】市万田磨崖十字架碑

個人

初期キリシタン時代の石造カルワリオ十字架で、礼拝用として建てられたものと想定される。秋月城跡から出土した罪標十字架の軒丸瓦と表現の仕方が重なり、また東京国立博物館が保管するメダイにも同じ形状のものが確認されている。

Rubbed copy of stone cross

21. 【拓本】正覚寺キリシタン墓碑群第一号

個人

天草市有明町上津浦正覚寺にある。正覚寺は1646(正保3)年に代官鈴木重成によって創建された寺院である。この地は南蛮寺の故地とされる。17世紀前期に作られたものといわれ、中央に[IHS]と罪標付十字架を刻んでいる。銘文「大つ□いんた／IHSに罪標十字架／慶長十一年／一月□□日」。

Rubbed copy of Christian gravestone

22. 【拓本】吉利支丹墓碑

個人

国指定重要文化財に指定されているキリシタン墓碑で、1610(慶長15)年につくられた半円柱形柱状伏碑である。中央上部には花十字紋が刻まれており、「FIRISACYE／MODIOG・XONE／(83)／GOXIRAI1610／IVG16QEICHO(15)」と銘文がある。

Rubbed copy of Christian gravestone

Ⅱ章｜島原・天草一揆の痕跡

Ⅱ-1.伝えられる戦況

多数のキリシタンたちが原城に立て籠もって幕府軍に抵抗した一揆軍の姿は、後世にも語り継がれた。書物や絵画など、戦況を伝える資料は数多く作成されている。また、実際に使われた武器も残されているなど、信仰のあり方を模索していた一揆勢の姿が浮かびあがる。

23. 原城攻囲陣営並城中図

原品：長崎県指定有形文化財
松浦史料博物館

島原・天草一揆も終盤にあたる原城での攻防を描いたもの。一揆鎮圧後に平戸藩主の命により描かれた。絵中には詳細な記載がみられ、幕府軍の本陣には松平伊豆守の陣を中央に配し、西国諸藩の軍が包囲している。天草四郎時貞は原城本丸近くにおり、二の丸、三の丸にも陣が張られていることがわかる。また、海上には鎮圧に参加したオランダ船も描かれている。

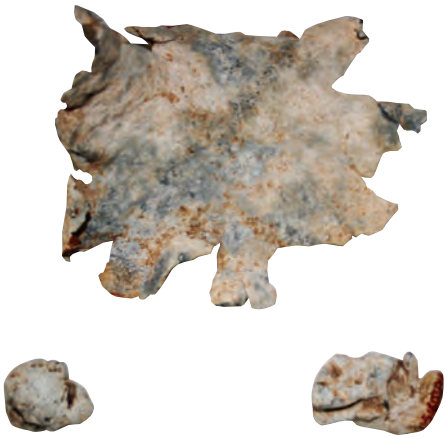
Encirclement of Hara Castle

24. 天草筒

天草市立天草キリシタン館

種子島で鉄砲造りを修得したといわれる絹野信尚が製作したものを天草筒という。天草筒は一揆勢が所有していたとされ、島原・天草一揆で用いられた武器のひとつである。

Amakusa-dutsu［Gun barrel］

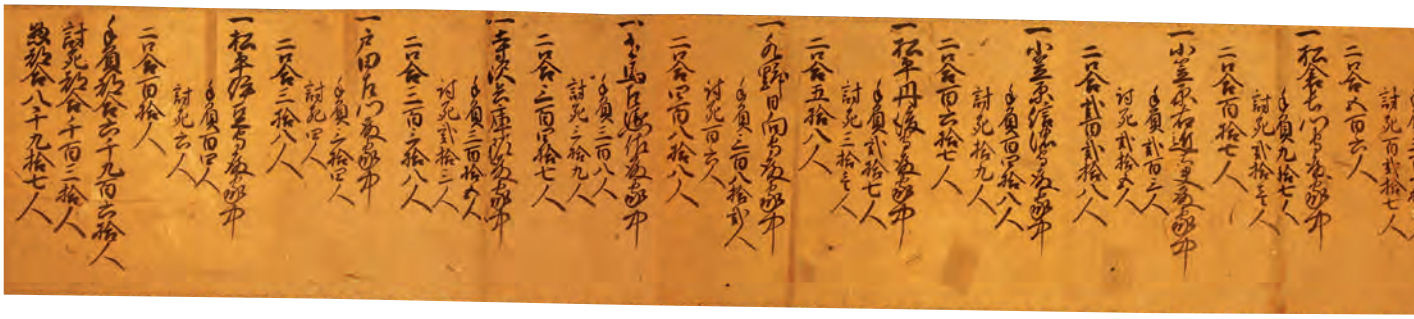


25. 砲弾

南島原市教育委員会

原城跡出土遺物。砲弾にも大小あり、なかには着弾により形が変形しているものもある。当時の戦乱の凄まじさを伝える資料のひとつといえよう。

Bullets

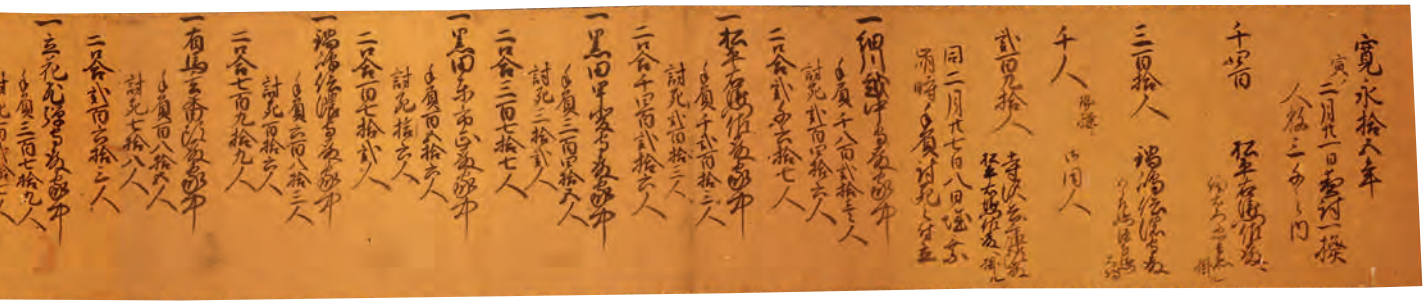


27. 筑紫薙刀

天草市立天草キリシタン館

筑紫薙刀は九州地方を中心に流通したもので、鉈のような形状をしたものである。仲哀天皇の皇后にあたる神功皇后が所持していたという伝承もある。この薙刀を振り回して幕府軍にキリシタンたちは抵抗した。

Chikushi-naginata［Hatchet sword］

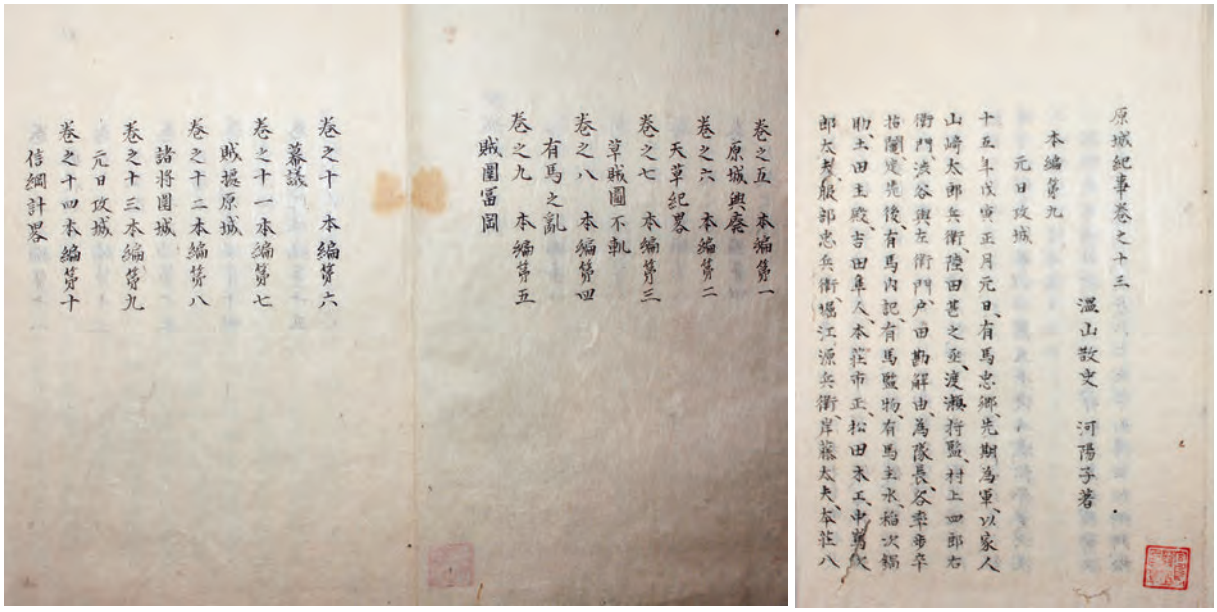


26. 天草・島原の乱手負討死一件

天草市立天草キリシタン館

1638(寛永15)年2月21日、長引く籠城の末、食糧などが欠乏していた一揆勢は、黒田・鍋島の陣中に夜襲をかける。この資料にはその時の一揆勢3000人の配分が収められている。また、総攻撃で幕府軍が被害を受けた。手負いや討死の人数も記されている。

Records of Amakusa-Shimabara Rebellion



28. 原城紀事

西南学院大学博物館

この資料は、1846(弘化3)年に河北温山が記したもので、幕府側目線から描いた資料である。幕府軍は一揆軍の軍勢や兵数、さらには原城落城後の戦後処理など含めて記されている。元日の原城攻防など生々しい戦闘の様子が描かれている。

Records of Hara Castle

Ⅱ-2.戦場の跡から

島原・天草一揆の舞台となった原城跡からは、当時の戦況を物語る多くの発掘成果が挙げられている。籠城していた彼らがどのようにして戦っていたのか。そこには信仰というつながりのもとで結びつき、幕府軍に抵抗していた姿があった。

29. 十字架

南島原市教育委員会

原城跡出土遺物。原城に籠城した一揆軍は鉛製の十字架を製作している。鉛を平たくして十字架を形作ったり、穴が下部にあけられた「逆さ十字架」もつくっている。急ごしらえでありながらも製作されているなど、原城籠城中に信仰していた様子がこれらからもうかがい知ることができる。

Cross

30. 十字架

南島原市教育委員会

原城跡出土遺物。十字架の縦軸、横軸ともに大小の膨らみのある丸型で構成されている。縦横が交差するところは球状になっている。下部に紐を通す穴があることから「逆さ十字架」を表現したものになろう。

Cross

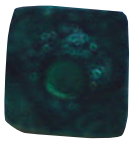
(表)　上部拡大　(裏)　中心部拡大

31. 十字架

南島原市教育委員会

聖遺物を納めることができる仕様になっている十字架。表裏とも背景には魚子模様が細工されている。表には上部に星が配され、茨冠、釘貫、金槌が鋳込まれている。さらに3本の釘、先端に葡萄酒を染みこませた槍など受難の道具がある。細かいながらもキリスト教の意匠がちりばめられている。裏には蔦状の植物がある。

Cross



32. ロザリオの珠

南島原市教育委員会

原城跡出土遺物。ロザリオ(数珠)の部分であり、コンタともいう。ガラス製のものが多く、これもそのひとつである。色や形状も異なることから、別々のロザリオの珠である。原城に籠城する前に持ち込まれたものと推測される。

Rosary

33. メダイ

南島原市教育委員会

原城跡出土遺物。表裏にフランシスコ・ザビエルとイグナチオ=デ=ロヨラが鋳込まれている。ザビエルは手を胸元にあてて祈りのポーズをとり、天を仰いでいる。ロヨラは横向きであり、ザビエルとともに聖人をあらわすニンブス(光輪)が表現されている。

Medal

34. メダイ

南島原市教育委員会

原城出土遺物。表裏にイエス・キリストと聖母マリアが鋳込まれているメダイである。イエス・キリストは鼻筋が通り荘厳な表情、聖母マリアはベールを身にまとって凛としている。ともに横向きで、上半身の肖像である。

Medal

35. メダイ

南島原市教育委員会

原城出土遺物。片面は劣化から判然としないが、もう一面には磔刑のキリストが鋳込まれている。上下左右につまみ部分があるのが特徴のメダイである。

Medal

Ⅲ章 途絶えなかった祈り

島原・天草一揆によって、幕府は禁教令を一層強化していく。幕府のこうした政策のなかでも失われなかったものが彼らにはあった。いわゆる“潜伏”形態をとることによる信仰のあり方は、彼らにとって苦しい時代をすごすことにはなったものの、後世まで守り続けることができたのであった。

36. 潮隠しクルス

天草市立天草キリシタン館

天草灘の洞窟にあったとされるキリシタン遺物で、石に十字架がはっきりと刻まれている。祭事などにつかわれる礼拝用と思われ、通常は砂で覆われて十字架は隠された状態になる。干潮時になるとこの砂がはらわれ、十字架があらわになった。

Cross hidden in the tide

37. 隠し十字仏

天草市立天草キリシタン館

台座部分と本体が分離できるこの仏像は、写真のように十字を形どることができる。通常、仏像の体をなしていることから、潜伏キリシタンにとって良い信仰方法となっていた。天草の潜伏キリシタンたちの信仰を維持するための創意工夫がみられる。

Image of Buddha carved with cross

38. マリア観音像

西南学院大学博物館

慈母観音をマリアと同一視して信仰の対象としていたものをマリア観音という。この資料は長崎の浦上村の潜伏キリシタンが所持していたものと同型である。多数の潜伏キリシタンが長崎奉行所から検挙された浦上四番崩れではマリア観音も没収されたが、この資料は没収を免れたものである。

Mary *Kannon*

39. キリシタン魔鏡

西南学院大学博物館

キリスト教を信仰することが禁じられていたために、祈りを維持するためにさまざまな創意工夫がなされていた。キリシタン魔鏡もそのひとつで、一見すると普通の銅鏡だが、光を照射すると磔刑のキリストが浮かび上がる。当時の禁教政策の厳しさを物語る資料のひとつといえよう。

Magic mirror

Ⅳ章 海外交易の姿

大陸に近い九州では、古くから海外との交易が盛んにおこなわれていた。これをあらわすように、中国をはじめ、朝鮮半島やタイ、ベトナム産の陶磁器類が出土している。これら海外交流の蓄積は、九州でキリスト教が定着する土壌を築いていたのであった。

Ⅳ-1.博多の交流

博多では古くから盛んに貿易が行なわれていた。中世には貿易都市として大陸からの物資が多く行き交った。このなかには中国・朝鮮半島・タイなどからもたらされた陶磁器類があった。

40. 中国・瑠璃釉小壷(博多90次)

福岡市埋蔵文化財センター

Small pot

41. タイ・白釉鉄絵皿(博多85次)

福岡市埋蔵文化財センター

White glaze with iron

42. 中国・龍泉窯系青磁碗(博多築港線3次)

福岡市埋蔵文化財センター

Celadon of Longquan

43. 中国・景徳鎮青白磁筆架(博多139次)

福岡市埋蔵文化財センター

Jingdzhen blue-white porcelain

44. 朝鮮王朝・褐釉陶器瓶（博多124次）

福岡市埋蔵文化財センター

Brown glazed bottle

45. 高麗～朝鮮王朝・
象嵌粉青沙器鉢（博多35次）

福岡市埋蔵文化財センター

Buncheong ware bowl with inlaid inscription

46. ベトナム・青花皿（博多172次）

福岡市埋蔵文化財センター

Vietnamese Blue-and-white

Ⅳ-2.天草の交流

天草には中世期に多くの文物がもたらされた。中世城郭跡から出土した中国やベトナム産の陶磁器類などを通じて、天草の海外交流を紹介する。

47. 石製印鑑（本渡城跡）

天草市立天草キリシタン館

Stone seal

48. ベトナム産青花（棚底城跡）

天草市教育委員会

Vietnamese Blue-and-white

49. ベトナム産鉄絵大盤（河内浦城跡）

天草市教育委員会

Vietnamese underglaze plate with iron brushwork

50. 磁州窯系鉄絵壷片（河内浦城跡）

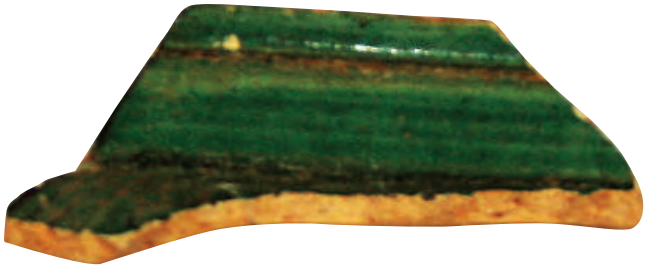
天草市教育委員会

Cizhou iron glaze

51. 緑地金襴手碗片（三川城跡）

天草市教育委員会

Gold-painted green base porcelain



52. 華南三彩角瓶（三川城跡）

天草市教育委員会

Color glazed square bottle of southern China

53. 五色大皿（三川城跡）

天草市教育委員会

Five-colored plate

Ⅳ-3.大分の交流

中世大友氏は中国南部や東南アジアと交流をはじめ、大陸から様々な陶磁器や磁器がもたらされた。なかには香辛料が入れられていたものも出土するなど大友氏の趣向や流通形態も示される。

54. 華南三彩ー神像形置物（大友75次）

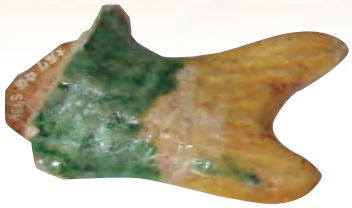
大分県教育庁埋蔵文化財センター

Color glazed of southern China

55. 華南三彩ー駱駝形水滴（大友41次）

大分県教育庁埋蔵文化財センター

Color glazed of southern China



56. 華南三彩ー魚形水滴（大友7次）

大分県教育庁埋蔵文化財センター

Color glazed of southern China

57. 華南三彩ー馬形水滴（大友12次）

大分県教育庁埋蔵文化財センター

Color glazed of southern China

58. 華南三彩ー鳥形水滴（大友5次）

大分県教育庁埋蔵文化財センター

Color glazed of southern China

59. ミャンマー製黒釉陶器壷（大友51次）

大分県教育庁埋蔵文化財センター

Black glazed of Myanmar

60. タイ製臼（クロッ）（大友41次）

大分県教育庁埋蔵文化財センター

Thai mortar

61. ベトナム産白磁印花文碗（大友12次）

大分県教育庁埋蔵文化財センター

Vietnamese white porcelain

Ⅳ-4.島原の交流

島原では日野江城跡から出土した法花を紹介する。有馬氏の居城であった日野江城跡からは国産陶器・貿易陶磁器が出土しており、有馬氏の海外交流の一端がわかる。

62. 法花（日野江城跡）

南島原市教育委員会

Chinese clolored porcelain *Hoka*

63. 法花（日野江城跡）

南島原市教育委員会

Chinese clolored porcelain *Hoka*

特別展関連

キリシタン考古学資料 所在地図

作成者・博物館GP研究員　中尾祐太

凡例

・本資料は特別展開催にあたり、展示した資料であり、キリシタン考古学資料の全てを網羅しているものではない。

・地図中の●印は遺跡所在地および遺物出土地、■印は、所蔵博物館、▲印は所蔵自治体を示す。

論考

日本におけるキリシタン墓碑の様相

長崎歴史文化博物館研究グループリーダー
大石　一久

1　はじめに

日本のキリシタン時代は、ザビエルの鹿児島上陸(1549年)を起点に徳川幕府による全国禁教令(1614年)までを下限にした場合、約65年間である。この間、キリスト教は、数少ない宣教師のもとで、日本にこれまでにない思想・文化を浸透させながら着実に信徒数(1614年時点で約37万人)を増やしていった。その過程で、キリスト教徒独自のキリシタン墓碑も造立されていったが、その形状はそれまでの日本伝統の墓石とは全く異質なものであり、しかも墓石と死者に対する弔いの観念が異質なものであった。日本の墓石はそれ自体に死者の魂が宿るものへと変容していく性格を有しているのに対し、キリシタン墓碑は基本的に被葬者のモニュメントとしての性格が強いものであった。微力ながら中世の石塔を専門にしている私にとっては、この一時期のキリシタン墓碑の出現は、形態的に単にキリスト教関係者の墓碑というだけでなく、その後の現代まで続く日本の墓石を決定付ける上で大きな転換期となっている点で重要な意味を持っている。そこで2006年から日本全国のキリシタン墓碑を調査してきたが 本年3月、南島原市世界遺産室から『日本キリシタン墓碑総覧』(長崎文献社)を発刊することができた。ここでは今回の調査を通じて得た成果のいくつかを概略的に紹介させていただく。

2　キリシタン墓碑の定義と基数

キリシタン墓碑ほど、その捉え方がまちまちな墓石はない。キリシタン墓碑に関する研究会などに参加しても、そこに参集されている一人ひとりの捉え方が様々であり、最終的に建設的な話し合いができないことを痛感している。そこでキリシタン墓碑の形態上の定義が求められるわけだが、今回の全国調査では(1)キリシタン意匠を施した墓碑であること(2)キリシタン特有の伏碑であることなど一定の定義(基準)に基づいて特定した(詳細は『日本キリシタン墓碑総覧』参照)。その結果、全国でこれまでに192基のキリシタン墓碑とキリシタン関連石造遺品10基(点)、総計202基を確認した。

3　墓碑の分布

全国で確認した初期キリシタン時代の墓碑及びキリシタン関連石造遺物の総計202基という基数は、あくまでも現存する最小の基数であることはいうまでもない。遺品のほとんどは禁教・弾圧期に破壊された後の姿であり、地下遺構とは切り離された単品として偶然存在している遺品にすぎない。本来であれば、現基数の数十倍以上のキリシタン墓碑や関連石造遺物が存在したものと考えられる。とくに現在の長崎市中心部(旧六か町)には他のキリシタン地域以上に多くのキリシタン墓碑が建碑されたと考えられるが、現在では1基も確認することができない。禁教・弾圧期に破壊され、海中や土中に投棄されたものと考えられる。

〔長崎県、主に島原半島に集中〕

全国で確認される墓碑総計の192基のうち約76％にあたる146基が長崎県で確認される(資料1)。しかもそのうち131基が島原半島にあり全国の約68％が集中しているが、その131基中112基(約58％)は南島原市内で確認され、その分布密度の濃さは圧倒的である。次に京都市で20基(約10％)、熊本県で14基(約7％)、大阪府で8基(約4％)、大分県で4基(約2％)となっている。また、礼拝石などキリシタン関連石造遺物は総計で10点が確認され、大分県で5点、長崎県で4点、佐賀県で1点となっている。

墓碑の形式別基数をみれば、全国で柱状伏碑が53基、台付柱状伏碑が5基、板状伏碑が112基、立碑21基(西海市平原の「INRI」碑を含めると22基)となっている。板状伏碑がキリシタン墓碑全体の約58％を占め、次いで柱状伏碑(台付柱状伏碑を含めた58基)が約30％、立碑が約12％となっている。

次に九州圏と関西圏に分けて墓碑形式をみれば、柱状伏碑(台付柱状伏碑を含む)は九州圏で47基、関西圏では

資料1　県府別キリシタン墓碑及び関連石造遺物総計

石造物名　　県府名		長崎県	佐賀県	大分県	熊本県	大阪府	京都府	全国種目別総数	島原半島総数。右は南島原市総数	
墓碑基数総計		146基	基	4基	14基	8基	20基	192基	131基	112基
柱状伏碑		32		3	7	3	8	53基	27基	18基
板状伏碑		104		1	7			112基	98基	90基
墓碑(伏碑か立碑か特定不可)		1						1基		
台付柱状伏碑		5						5基	5基	
立碑	整形立碑	1				5	12	18基		
	自然石立碑	3						3基	1基	基
関連遺物	関連石造遺物総計	4点	1点	5点				10点	2点	2点
	礼拝石	2	1	3				6点	1点	1点
	大十字架碑			2				2点		
	基壇	1						1点	1点	1点
	石棺蓋石	1						1点		
【総計数】		【長崎県】	【佐賀県】	【大分県】	【熊本県】	【大阪府】	【京都府】			
墓碑		146基		4基	14基	8基	20基			
関連石造遺物		4点	1点	5点						

11基である。それに対し板状伏碑112基はすべて九州圏で確認され、関西圏では全く製作された形跡がない。

立碑は、九州圏で4基、関西圏で17基が確認される。九州圏の3基は自然石立碑とCipoと考えられる半円形板状整形立碑の1基である。それに対し、関西圏の17基は在来石塔(仏塔)を転用また一部改造した墓碑(円頭形板状立碑)であり、その墓碑としての性格は九州圏のものとは異なっている。

現段階での確認状況から判断すれば、キリシタン墓碑及びキリシタン関連石造遺物の分布は非常に偏在していることがわかる。九州圏では島原半島を中心とした長崎県、熊本県、大分県、佐賀県、関西圏では大阪府(四條畷市、八尾市、茨木市の3市)と京都市内だけであり、中国・四国地方や関東以北などでは明確なキリシタン墓碑及び関連遺物は確認されていない。現段階での九州圏及び関西圏での分布地は、1580年にヴァリニャーノが定めた三布教区(下・豊後・都)にほぼ一致するものと考えられる。

4　キリシタン墓碑の編年と建碑時期

現在までに確認した全国のキリシタン墓碑192基のうち、紀年銘を刻む墓碑は41基である。その中で日本最古の紀年銘をもったキリシタン墓碑は天正9年(1581)銘の千光寺跡出土「礼幡」墓碑(大阪府四條畷市　Fig.1)、ついで天正10年銘八尾・マンショ墓碑(大阪府八尾市　Fig.2)である。ともに整形立碑であるが、天正9年銘「礼幡」墓碑は日本在来の石塔(圭頭形)に系譜をもつ代用墓碑、天正10年銘マンショ墓碑は日本で発生した特殊形墓碑(在来の尖頭形墓塔と捉える説あり)である。これらの事例から、日本に本格的にキリシタン特有の伏碑が登場する前のキリシタン墓碑は、在来石塔を転用した独自のキリシタン墓碑であった可能性が強い。

では、西欧がルーツだと思われる本格的なキリシタン伏碑はいつぐらいから日本で建碑されてきたのだろうか。今回の調査では、慶長9年(1604) 9月銘の土手之元第1号伏碑(長崎県雲仙市　Fig.3)が日本最古の伏碑であり、ついで慶長9年12月20日(1605年2月7日)銘の島原城内第1号伏碑(長崎県島原市)である。ともに半円柱状をなしているが、伏碑のもう一つのタイプである板状形伏碑の最古は慶長11年(1606)銘の「里阿ん」墓碑(長崎県雲仙市　Fig.4)である。紀年銘に従えば1600年代初期がキリシタン特有の伏碑の初源であり、その最高のモデルタイプが1610年銘の国指定「吉利支丹墓碑」(長崎県南島原市　Fig.5)ということになる。仮にキリシタン特有の伏碑が1600年代初期ころに日本で初めて造立されたとした場合、ザビエル伝道から約50年の時間を経て、ようやく導入されたことになる。

日本におけるキリスト教の信徒数は1601年当時で約30万人、禁教令が出された1614年当時で37万人前後だといわれている(五野井隆史『日本キリスト教史』)。このような信徒数の増加がみられながら、また日本の伝統的神仏信仰を「悪魔の教え」として否定し、神社仏閣や墓石までも破壊を行ってきたキリスト教、その一神教的排他性の強い宗教にあって、何故に自分たちキリスト教特有の伏碑の概念を日本に導入し実際に建碑するのに約半世紀もの時間を要したのか疑問である。1600年代初期以降本格的に新様式のキリシタン伏碑が登場するまでは、宣教師の書簡などに記されているように木製の十字架などを立てて地上標識としたり、大十字架碑(クルザード)の側に埋葬するだけで特別な地上標識は作らないのが一般的であったとも思われる(『フロイス日本史』4五畿内篇Ⅱなど)。ただ、伏碑の導入にザビエル来航から約半世紀もの時間が費やされたのは何故か、しかもほぼ同時期に日

Fig.1　天正9年銘「礼幡」墓碑
（大阪府四條畷市）

Fig.2　天正10年銘「八尾マンショ」墓碑
（大阪府八尾市）

Fig.3　慶長9年銘土手之元第1号墓碑
（長崎県雲仙市　半円柱形柱状伏碑）

Fig.4　慶長11年銘「里阿ん」墓碑（長崎県雲仙市　扁平形板状伏碑）

Fig.5　1610年銘吉利支丹墓碑
（長崎県南島原市　国指定　半円柱形柱状伏碑）

本と同じくキリスト教宣教を受けた諸外国との比較はどうなのか、さらに伏碑導入に関して宣教師等の指導・介入があったのかどうかなど、多くの問題が見えてきた。今後の課題である。

5　墓地景観に見られる異文化世界

今回の全国調査でいくつか課題が見つかったが、その中で墓地景観の問題は重要である。
全国で192基確認されるキリシタン墓碑のほとんどは、キリシタン禁教期に破壊されたり遺棄されたものである。そのため墓碑がある現在の場所は、移設された後の二次的な場所であり建碑当初からの景観とは言い難い。その中にあって比較的建碑当初の景観を想定できるキリシタン墓地といえば、公認から禁教期に想定される下藤墓地（大分県臼杵市野津町）と潜伏キリシタン時代の垣内墓碑群である。前者は、やや傾斜をもった平地状の墓域に長方形状の石組遺構や地上標識としての粗雑な伏碑が多数配置されている。後者の垣内墓地は初期キリシタン時代の伏碑の系譜を受け継ぐ潜伏キリシタン時代の長墓群で構成されており、急斜面の山肌を平地状に削平した墓域に各長墓を約40～50cmの間隔で配置している。この垣内墓地の延長線上に明治6年（1873）以降に築造された近代キリスト教墓地があるものと解釈される。

近代キリスト教墓地の典型といえば田平教会堂に付随した瀬戸山墓地(平戸市田平町)で、大正7年に聖別(祝別)された平地状の墓地である。この墓地では、昭和40年ころまでは墓域の中心に立てられたクルザード(大十字架)を軸にして前方が成人用、後方が子供用、さらに各区が男女(左側男子、右側女子)ごとに区画され、亡くなった順ごとに土葬の伸展葬で埋葬されていた。しかも埋葬の地所は教会堂に集う信徒の中で亡くなった順ごとに決まっていき、性別・年齢差でさらに細かく区分されていた。そのため同一の血縁家族でも埋葬された場所はバラバラであった。教会堂に集う信徒は皆大家族の一員の意識であり、石壁で結界された墓域内は聖なる場所であった。

以上、限られた資料をもとにキリシタン墓地の景観について見てきたが、総体的にみて初期キリシタン時代の墓地景観の特徴は平地状になった地所ということが挙げられ、単独墓(家族墓)を前提する仏教関係の墓地とは異質な景観が見て取れる。

ところで、初期キリシタン時代に年齢や性別の区別で埋葬していたかどうか現段階での確認はできないが、墓地の選定に宣教師が関わり、墓地の祝別を行ったことは宣教師の記録に見られる。五島での出来事として「1572年、イタリア人アレシャンドゥレ・ヴァラレッジオ師が日本からの帰途、インドより、ポルトガル人のイエズス会の司祭らにしたためた書簡」(『十六・七世紀イエズス会日本報告集第Ⅲ期第4巻』)の中で、宣教師が墓地の選定を行ったこと、墓地選定後は墓域を壁で囲い、墓地に大十字架を立て、諸聖人の祝日の日(11月1日)に墓地を祝福したことなどが記されている。クルザードは「担いで運ぶ」の表現から素材は木材だったと思われるが、墓地の選定や墓地を囲む壁(聖と俗の結界)、墓地の祝福(聖別)、クルザードなど、ほぼ全ての事項が約350年後に造られた瀬戸山墓地のあり方と一致している。この点からいえば、明治6年以降に築かれた近代キリスト教の墓地は、初期キリシタン時代の墓地を探る上で貴重な情報を提供している。

6　おわりに

墓石、それは時代と生きた人々の記憶そのものである。その中にあって異文化の記憶を今に蘇らせる証しがキリシタン墓碑であり、しかもそのスピリチュアルな世界はあだ花のように日本の歴史から消え去った一時代の意識そのものの表象でもある。

葬制は、一般に葬儀→葬送→埋葬と続き地上施設(標識)築造で一応の終了をみる。葬儀、葬送、埋葬は基本的にその日の内に終了するが、地上施設はその施設内容によってある程度のタイムラグが生じる。簡単な地上施設(例えば木製の卒塔婆や十字架など)であれば埋葬終了後に設置できるが、整形された墓石でそこに文字(仏塔の場合は戒名や種字など。キリシタン墓碑の場合は洗礼名や「ＩＨＳ」、また十字架紋など)などを刻むとなると、そこには在家側の経済的事情も絡んで年単位でのタイムラグが生じてくる。だから被葬者の死亡年と墓石建立年には開きが生じてくるのであるが、宗教関係者は葬制にどこまで直接関与したのか、とくにここで問題にしているキリシタン関係の場合、葬儀→葬送→埋葬に続く石造整形墓碑の建碑に宣教師などはどこまで指導・関与したのかなどの課題も出てきた。さらに墓地の選定や景観、墓碑の配置と共同体との関係、またこれまで見たこともないキリシタン墓碑(主に伏碑)が目前に登場したとき、在来仏塔とあまりにもかけ離れたその形態に受容する在家側には動揺や混乱など文化的摩擦は起きなかったのかなど、埋葬方法の違い(座棺と寝棺)を含めて、今後追求すべき事項は多くある。各位の御教示を仰ぎたい。

なお、上記したキリシタン墓碑に関する内容をより詳細に知りたい方は、『日本キリシタン墓碑総覧』(大石一久編集・南島原市世界遺産室企画・長崎文献社発行)を御一読いただければ幸いである。

原城出土のキリシタン資料

南島原市教育委員会文化財課　課長
松本　慎二

有馬の城

有馬氏の城である原・日野江の両城は、長崎県の南東にある島原半島の南西部に位置する。

日野江城は北有馬町に原城は南有馬町に所在して、南東は有明海、北は雲仙山麓を望む。両町は有馬川を境界にして、東は西有家町、南西は口之津町に接している。

日野江城は中世から江戸時代の初めにかけてこの地域の領主であった有馬氏の居城であり、14世紀の南北朝時代に築かれたと伝えられている。

原城は、戦国時代の有馬氏の重要な城であり、寛永14年(1637)に勃発した島原・天草一揆の舞台となった城である。城は、海岸に突き出した丘に築かれ、本丸、二ノ丸、三ノ丸、天草丸、鳩山出丸などから構成されていた(図1)。東は有明海、西と北は一部をのぞいて低湿地に囲まれた天然の要害であった。本丸は石垣で囲まれ出入口は桝形となり、織田信長や豊臣秀吉の時代に完成された石積み技術が用いられ、近世城郭の特徴をもった(図2)。その特徴は、高い石垣、建物に瓦を使用、建物を礎石上に備えていた点である。一方、本丸以外は自然の地形を活かした土づくりであった。

現在の遺構の大半は慶長年間前半の有馬氏によるものであり、島原・天草一揆期の遺構が含まれている。また、城に対面する丘陵地帯は幕府軍が布陣した場所で、大体の地形は当時の遺構をそのまま残していると思われる。

原城発掘

寛永14年(1637) 10月に勃発した「島原・天草一揆」は、九州西部の島原と天草の両地域において起った大規模な反乱であり、島原地方では島原城で、天草地域では富岡城などで戦闘が繰り広げられた。一揆軍は島原で合流、天草四郎時貞を盟主とし原城に籠城し幕府と対立したが、圧倒的な幕府軍の総攻撃により乱は終結した。その原城は、乱後の現地処理による徹底的な破壊により、その存在をも否定するかのように埋め尽くされてしまったのである。

調査以前の原城は一部分に石垣を見ることが出来るだけで、ほとんどの遺構は、破壊後埋め込まれ地表面観察では確認できない状況であった。

平成4年(1992)から実施している発掘調査は、本丸地区を中心に行い、多くの遺構・遺物が出土した。検出した虎口遺構や石垣遺構、キリシタン関係遺物などは原城の姿を現しただけでなく、島原・天草一揆を考察するうえでかなり貴重な資料となった。今まで勝者であった幕府側の文献史料や絵画資料でしか研究されなかった一揆を、敗者である一揆軍側から見つめ、考え直すことができるようになったのである。このように、考古学的な分野と文献史学的な分野の接点のなかで、改めて原城及び島原・天草一揆の全貌を捉え、その位置づけや評価の再検討を行うことは画期的のことであった。

キリシタン資料

出土したキリシタン関係遺物の主なものは、十字架、メダイ、ロザリオの珠、花十字紋瓦である。ここでは主にキリシタン関係の遺物について報告する。

①十字架

十字架は、鉛製十字架が36点、銅製の十字架が2点の38点が出土している。形状的に、縦横軸が直線的なものとしてまとめⅠ類とし、さらに3種類に細分した。また、縦横軸に膨らみを持つもので、木製十字架玉を表したものとしてまとめⅡ類とし、さらに2種類に細分した。他に、聖遺物容器と十字架レリーフ状のものを分けた。

Ⅰ－A　（図3・図9）

Ⅰ－Aは、縦横軸は直線的で、縦軸は中空の筒状のものである。磔刑像は付かない。7、8、13、33、36は鉛製で、縦横軸の断面は円形をしている。23、25、29は鉛製で、縦横軸の断面はほぼ方形となる。

Ⅰ－B　（図3）

Ⅰ－Bは、縦横軸は直線的で、縦軸の上部に紐を通す孔を持つものである。磔刑像は付かない。16は鉛製で、平板状になり、紐を通す孔は十字架面に対し垂直に付く。下部は欠損している。

Ⅰ－C　（図4・図9）

Ⅰ－Cは、縦横軸は直線的で、縦軸の下部に紐を通す孔が開いているものである。6、9、14、28、30、38は断面が方形となる。3、15、21は、縦軸は中空の筒状ではなく板状となり、縦軸の下部に紐を通す孔が開いている可能性があるもの。この遺物については、下部が欠損しており、詳細は不明であるが、紐を通す孔が上部にはなく、また、中空の筒状でもないため、縦軸の下部に紐を通す孔が開いている可能性があるものとした。

Ⅰ－BとCにおいて、紐孔の位置により、現在普通に思われている、正常方向に吊されるものと、上下逆方向に吊されるものであることがわかる。この上下逆方向に吊るされる十字架については、長軸の下側に紐孔が開いているものであり、現代の十字架では見られない形態のものである。現段階では解明できていないが、キリシタン時代の十字架はロザリオに付く十字架と吊し用の十字架があるとされ、ロザリオの十字架は、ロザリオの環状部につなげるもので、横軸1点、縦軸2点の木製十字架玉3種3個で構成され、紐でつながれるものであり、上下逆方向となる。吊し用十字架は、十字架単独で首から吊すものである(1)。

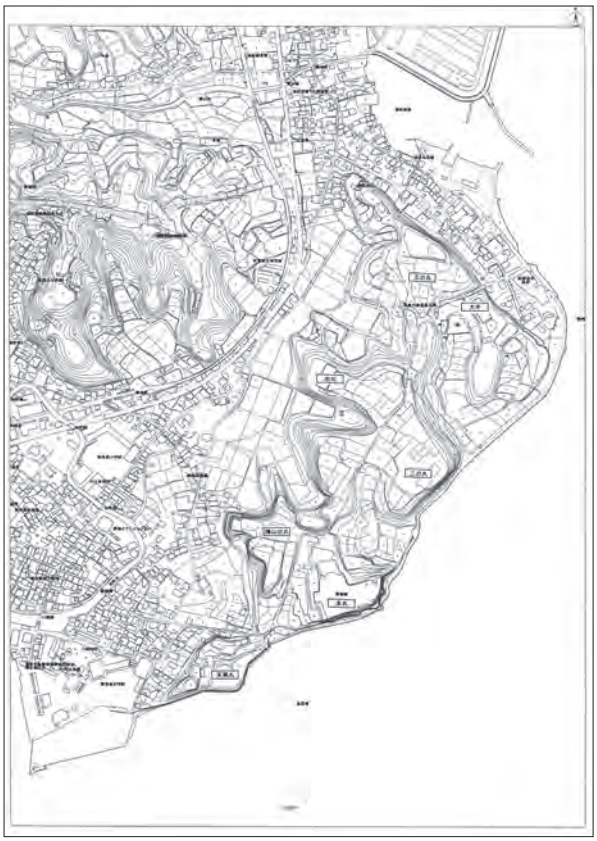
Ⅱ類は、木製3玉型状のものである。木製の3つの玉を組み合わせた十字架を型取りし、鉛で一体成型したもので、縦軸は中空の筒状となるものと、上下左右の端に膨らみをもつものにわけられる。

Ⅱ－A　（図5・図9）

Ⅱ－Aは、木製三玉型状のものである。木製の三つの玉を組み合わせた十字架を型取りし、鉛で一体成型したもので、縦軸は中空の筒状となる。1、2、5、10、12、18、22、24、37であり鉛製である。24は、銅製のものであり、縦軸の下部に紐を通す孔が開いている。

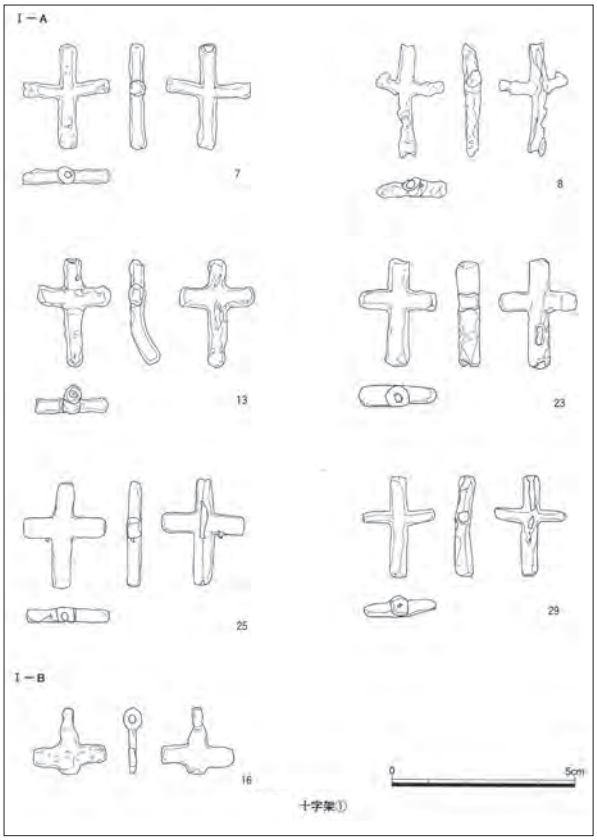
Ⅱ－B　（図6）

Ⅱ－Bは、縦横軸端に膨らみをもつもので、上下左右の端に膨らみをもち、縦軸は中空の筒状となる。26はガ

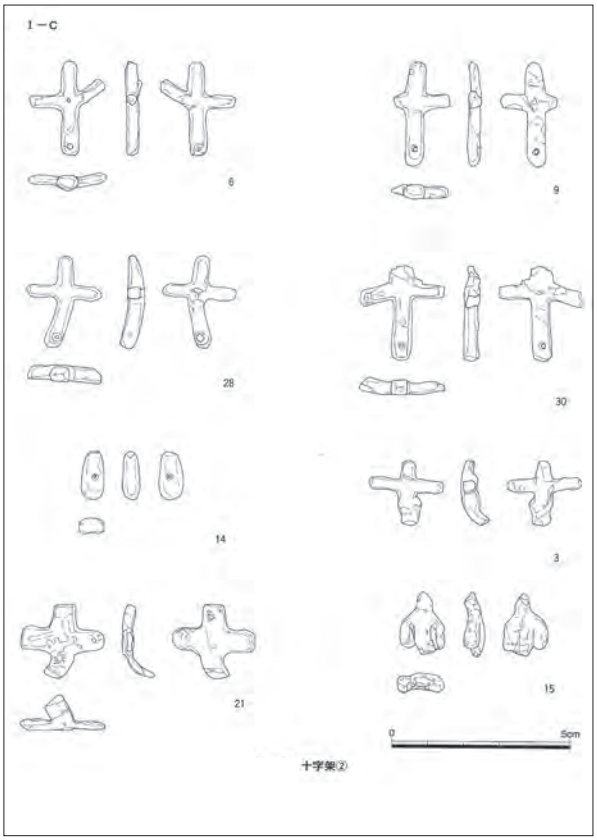


第１図　原城遺構配置図
南島原市文化財調査報告書　第４集　「原城跡Ⅳ」

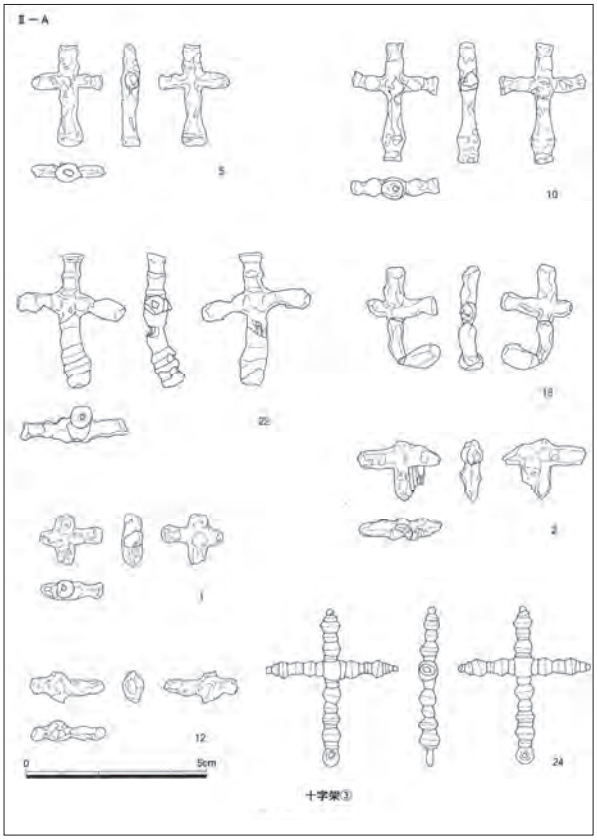
第２図　原城本丸遺構配置図
南島原市文化財調査報告書　第４集　「原城跡Ⅳ」



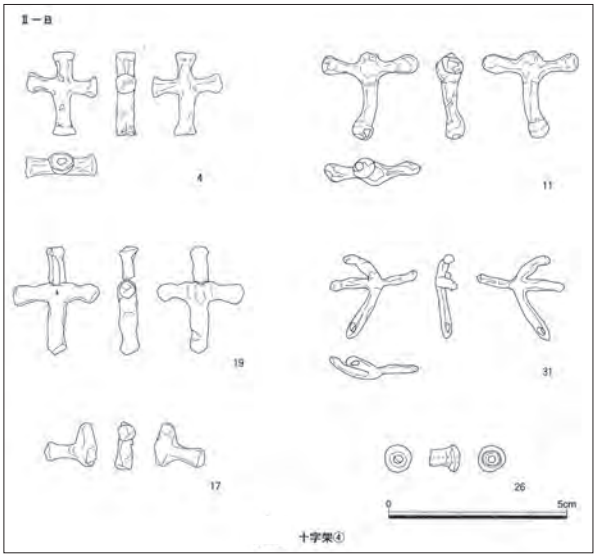
第３図　十字架　①
南島原市文化財調査報告書　第４集　「原城跡Ⅳ」



第４図　　十字架　②
南島原市文化財調査報告書　第４集　「原城跡Ⅳ」



第５図　十字架　③
南島原市文化財調査報告書　第４集　「原城跡Ⅳ」



第６図　十字架　④
南島原市文化財調査報告書　第４集　「原城跡Ⅳ」

ラス製で、三玉型の一部と思われる。31は、縦軸の下部に紐を通す孔が開いている。

聖遺物容器として、銅製の箱型十字架がある(図7．20)。出土した中では最大のもので縦7.3ｃｍ、横4.7㎝である。両面に図柄を施し、表面には、星、茨冠、金槌、釘抜、3本の釘、2本の槍、一つは先端に葡萄酒を染み込ませた槍が描かれるなど「受難の道具」の模様が描かれている。裏面には蔦状の植物が描かれている。両面とも背景には魚子(ななこ)文様が細工され、縁には縄状の文様が刻まれている。上部には環が付き、左右端に突起物が付く。下部にはこの突起物が外れた痕がある。側面は無柄である。同様のものが東京国立博物館に所蔵されている。表面には、釘、鎚、釘貫などの「受難の道具」の模様が描かれている。また、表面中央部に「IHS」の刻銘がある。裏面には竹葉が描かれている。両面とも背景には魚子(ななこ)文様が細工されている。表側を開けると内部が仕切られており、聖遺物容器とされている。時期は16世紀後期～17世紀初期の日本製である。

この2点の共通点は「受難の道具」を描き、背面には魚子文様が細工されていることであり東京国立博物館所蔵の聖遺物容器と同じく、原城出土の聖遺物容器は日本製の可能性がある。

また、昭和26年(1951) 2月に原城本丸跡から出土した金製十字架がある。縦4.3㎝、横3.2㎝で、金線を縒り合せた緻密なデザインが施され、篭状筒型となり、聖遺物容器と思われる。現在この十字架は南蛮文化館が所蔵されているが、非公開の資料となっている。

十字架のレリーフとして鉛製の平板状の片面に十字架のレリーフがついたものである(図7．27)。鋳型に鉛を溶かし込んだ状態であり、十字架製作過程の途中のようであると思われたが、十字架部の縦軸が1.9㎝、横軸が1.3㎝であり、出土した他の十字架と比較するとあまりにも小さいため、十字架単体での使用は考えにくい。下部は変形しているが、上部縁に残るカーブや下部は変形しているが楕円状の形状を残しているようであり、復元してみると、円形ないし楕円形となり、上部に穿孔を施すと、ペンダントとして利用できると思われる。裏面は無文である。

②メダイ(図8)

メダイは主に真鍮製である。形状は全て楕円形で、横両縁部と下縁部に突起物が付くものがある。3種類(Ⅰ～Ⅲ)の大きさと2種類(Ａ・Ｂ)に分けられ、それぞれの表裏には絵が描かれている。小さいものはロザリオの先端に付けられるものである。

楕円形の長径・短径で種別し、Ⅰ類は長径2ｃｍ以上、Ⅱ類は、長径が1.5ｃｍ以上で縁部の形状から2タイプに分けられる。Ⅱ類－Ａは、横両縁部と下縁部に突起物が付くもの。Ⅱ類－Ｂは、突起物が付かないもの。Ⅲ類は長径が1.5ｃｍ以下で、縁部の形状から２タイプに分けられる。Ⅲ類－Ａは、横両縁部と下縁部に突起物が付くもの。Ⅲ類－Ｂは、突起物が付かないものである。他に聖遺物容器を別枠とした。

図柄は、両面に「福者フランシスコ・ザビエル」と「福者イグナチオ・デ・ロヨラ」を描くものがある。ザビエルとロヨラの列福は元和5年(1619)に行なわれ、列聖は元和8年(1622)であった。したがってそのメダイは、その間に製作され日本に送られたものであろう。元和7年(1621) 9月、中浦神父は、ローマのマスカレニア神父に宛てた手紙で、その神父から受けたメダイなどに感謝して直ちに信者達に分け与えたと書いている(2)。出土したこれらのメダイはその時のものかもしれない。

他に、「聖杯とホスティアを拝む天使の絵」、ポルトガル語で刻銘された文字の「LOVVADO　SEIA　O　SANCTISSIMO　SACRAMENTO」(いとも尊き聖体の秘蹟はほめ尊まれ給え)、「天使聖体礼拝図」「無原罪の聖母像」「十字架上のキリスト」「聖杯とホスティアを拝む天使の絵」「聖人立像」「両手を広げた人物像」などが描かれる。

「聖杯とホスティアを拝む天使の絵」の図像は表面には天使聖体礼拝図、裏面には銘文を記したものしか存在しないことが報告されている(3)。また、「無原罪の聖母像」図像を、「アウレオーラの形状」「星の数」「結び目の数」「マリアの体の向き」の4点から分類を行われている(4)。

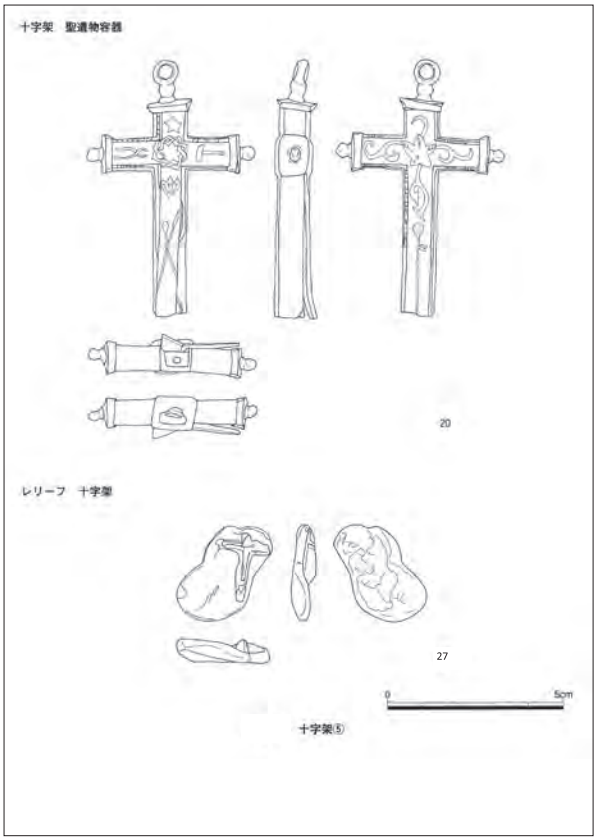
聖遺物容器としての、銅製の箱型メダイも出土した。表裏面は腐食のため図像は見えないが、Ｘ線写真で図柄が僅かに判明できる。浮かび上がった図柄は箱内面か裏面のどちらに描かれているかは分からないが、楕円形の圏線の中に罪票十字架が描かれ、圏線の外側には波状の文様が描かれている。箱形であるため何らかの蓋状のものがあると思われるが出土していない。

原城出土のメダイについては分類を行ったが、16世紀以降、ヨーロッパでは同様のメダイが大量に生産され、多種多様なものが存在しているという美術史学側からの報告(5)もあり、今後ヨーロッパなどで伝世している資料との比較研究や各分野からの学融合的な調査研究が必要とされている。

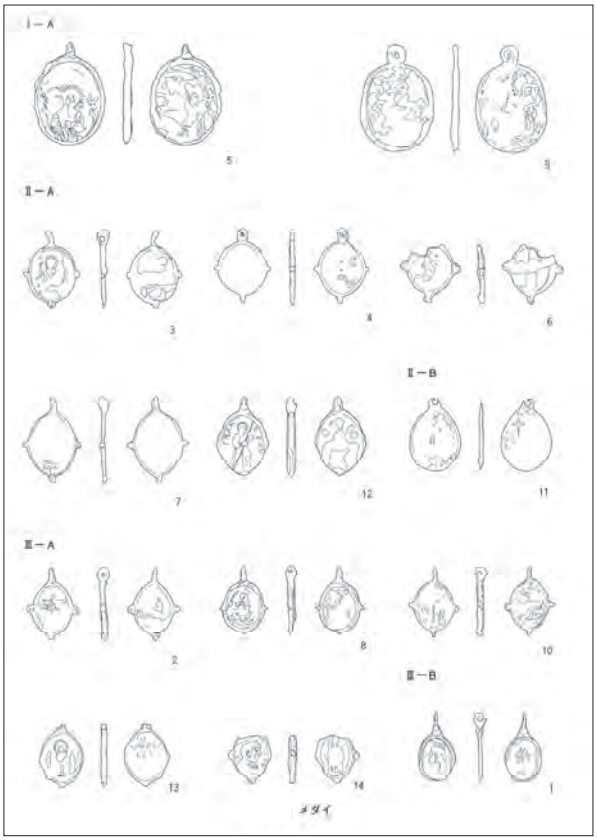
③ロザリオの珠(図10)

ロザリオの珠は、青色、緑色、白色のガラス製で、花形や球形また14面にカットされたものがある。すべてのものは中央に穴が開けられており紐を通すようになっている。

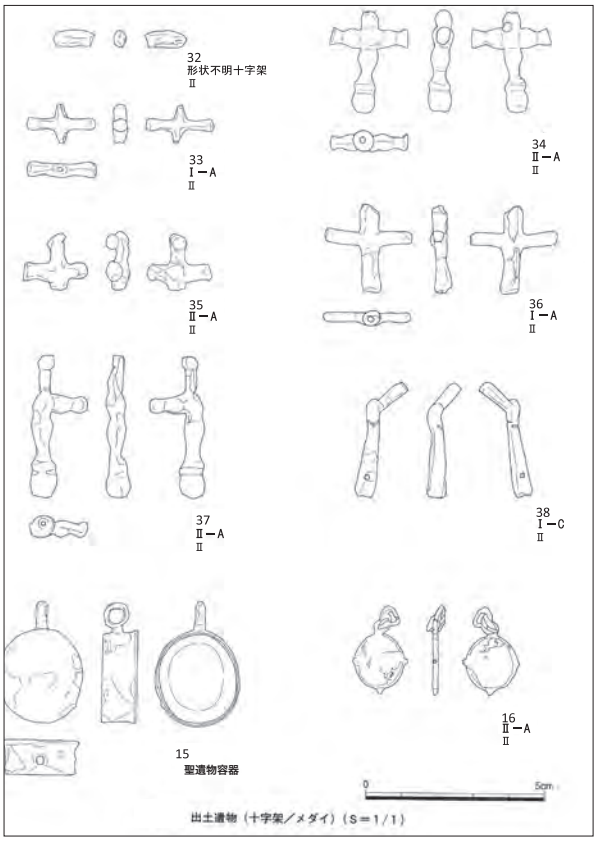
花形のものは、本珠の貫孔径が大きいので、通常のロザリオの珠として使用されたのではなく、根締めに使用したり、飾り珠の可能性もある。白色の珠は、ロザリオの小珠であると思われる。



第７図　十字架　⑤
南島原市文化財調査報告書　第４集　「原城跡Ⅳ」



第８図　メダイ
南島原市文化財調査報告書　第４集　「原城跡Ⅳ」

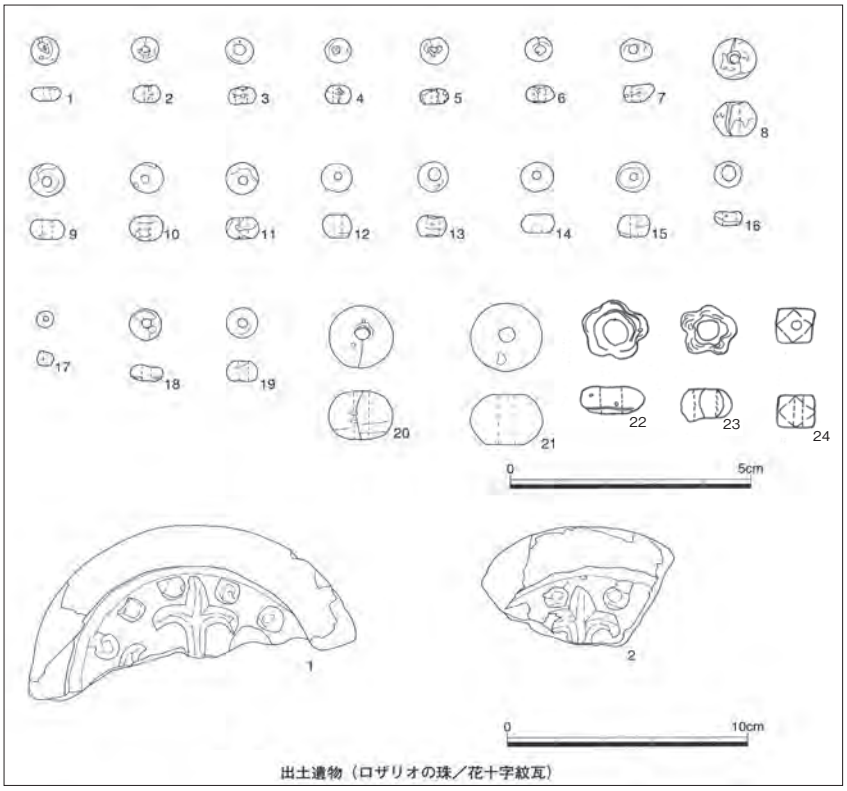


第９図　十字架／メダイ
南島原市文化財調査報告書　第４集　「原城跡Ⅳ」

④花十字紋瓦（図10）

花十字紋瓦片は、軒丸瓦と呼ばれる瓦の破片であり、瓦当面に花十字紋の模様を有する瓦である。慶長18年（1613）のキリシタン禁教令が出されるまでの間、長崎市では万才町遺跡のミゼリコルディア（福祉事業団）、勝山町遺跡のドミンゴ教会などキリスト教関係施設の屋根瓦に使用されていた。長崎市内からの出土は多いが、16世紀末キリシタン文化の中心地であった有馬の地では初めての出土で、しかもキリシタン大名の居城からの出土であった。鹿児島（鶴丸）城二之丸跡からも、4点の花十字紋瓦が出土していることが報告されている。

島原半島におけるキリシタン関係施設は半島南部において、セミナリヨ・コレジオなどの施設があったが建物跡など未だ検出されていない。今回原城での出土は，キリシタン大名である有馬晴信が築城した城からの出土であり、この瓦の使用施設・場所は不明であるが、出土した場所は本丸に入る最初の大きな門跡で、その施設に使用されていた可能性もある。宣教師の『1604年度日本準管区年報』によれば、晴信の新城が完成しキリスト教による祝福を受けたことが書かれている（6）。このことから、原城を象徴するような施設に使用されていたことが推定されるが、出土した花十字紋瓦片の断面はかなり磨耗しており、他に多く出土している瓦片の断面とは異なった様相であるため疑問が残るところである。慶長19年（1614）に長崎の諸教会やキリスト教施設がことごとく



第１０図　ロザリオの珠・花十字紋瓦
南島原市文化財調査報告書　第４集　「原城跡Ⅳ」

破壊されている。この瓦礫の山と化した教会跡から、この花十字紋瓦の破片を拾い大切にしていたものを、原城龍城の際に持ち込んだものと考えられないだろうか。破片面がきれいに磨耗しているのはそのためではないかと思われる。

また、同様に花十字紋瓦の転用資料が、戦国期大村氏の城下遺跡である三城城跡の武家居住区の一画から出土している。報告によると、花十字紋の外側に配した圏線から外周部を両面から丁寧な打撃により打ち欠き除去しており、何らかの必要に応じた加工品であるとのことであった(7)。

これらの花十字紋瓦について、文様形態の分類が行われている。文様は、花十字紋とその周囲に配された連珠文で構成される。配置としては、花十字を圏文で囲み、その外側に連珠が配されるものと、圏文が無いものの2種類に分類される。花十字の形態によってＡ～Ｄ類の4種、連珠文は、8個、12個、16個、20個の4種類に分類され、全7種の文様形態が存在していることが確認されている(8)。

しかし、花十字紋瓦の生産地や生産者に関しては一切不明であるため、島原半島での検出及び長崎市出土瓦との比較研究が今後の課題である。

出土人骨

キリシタン遺物の出土で注目すべきことは、必ず人骨が伴って出土していることであり、籠城中の信者が最後まで握りしめていたのであろう。乱の壮絶な最後の様子が窺えるものである。出土した人骨は、各虎口跡及び破壊された石垣の下、本丸広場一帯から出土している。完全に揃った骨はほとんど無く、みな部分的な骨であり、頭部がない上半身部、下半身部、腕、足、頭だけが散乱している。なかには、大腿骨に刀などの鋭利な利器による殺傷痕がみられるものもある。それらの人骨の調査・整理は、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・生命医科学講座で行われており、整理調査を行った分部哲秋氏が、2006年日本人類学会及び2007年日本解剖学会において発表された。その内容を見てみると、1993年から1997年の調査では320点の散乱人骨を調査された。そのうち約270点が本丸内から、約50点が本丸西側の櫓台石垣の下から出土したものである。人骨約320点について、クリーニングおよび復元作業を行い、各骨の残存部位を同定し、性別と年齢を推定された。

主要な四肢骨(上腕骨、大腿骨、脛骨)について、成人男性、成人女性、未成人に分け、未成人については分部(1981)の年齢区分に従って青年(成年、16～20才)、小児Ⅱ(13～15才)、小児Ⅰ(7～12才)および幼児（6才まで)に更に分類し、重複部位から確認できる人骨数(最少数)を出された。

確認できる人骨数は計36体で、そのうち成人男性は16体(44％)、成人女性は6～8体(17～22％)、未成人は12～14体(33～39）％であった。未成人の多くは13才以上(小児Ⅱと青年)で、12才以下は小児Ⅰが1体、幼児が1体と少数しか認められていない。主要な四肢骨には成人のみならず未成人の骨もかなり認められている。また、比較的残存状態のよい頭蓋1例は、成人男性で長頭傾向が認められる。

1998年から2003年の調査では、本丸正面の連続した枡形出入口から主に出土した351点の人骨について調査された。頭蓋および主要な四肢骨について、成人男性、成人女性、未成人に分類し、重複部位から確認できる人骨数(最少数)を出された。

頭蓋は、脳頭蓋が大部分で計一六個体が確認された。内訳は、成人男性　7体、成人女性1体、性別不明6体、未成人2体であった。 四肢骨は骨体中央部を基に、右、左側別に集計したが、右、左を合わせた本数は、大腿骨(149本)で最も多く、次いで上腕骨、脛骨で、頭蓋、橈骨、尺骨、および腓骨は少ない。側別に集計した結果では、左側の大腿骨が78体分と最も多く、女性および未成人と推定される例も合計20体分存在した。骨種別では、椎骨、肋骨がほとんど遺存しないこともあり、緻密質の厚くて頑丈な骨の遺存率が高いものと考えられる。また、頭蓋については、四肢骨に比べて遺存数が極端に少ないため持ち去られた可能性も考えられる。

刀などの鋭利な利器による受傷痕がみられるものは、1993年から1997年までの出土分では、四例に認められており、受傷部はいずれも右側大腿骨の骨幹部で、刀などの鋭利な利器による傷と考えられる。

1998年から2003年までの出土分で受傷痕が認められるものは、頭蓋2例、左側上腕骨1例(骨体部)、左側寛骨1例(寛骨臼の後部)、右側大腿骨7例(骨体部6例、骨頭1例)、左大腿骨2例(骨体部)である。これらのうち右側大腿骨骨体部1例が青年期、左大腿骨骨体部1例が女性、他11例は男性と推定されている。受傷痕は頭蓋に高頻度で存在し、四肢骨では特に大腿骨に多く認められるという報告であった。また、これらの受傷痕は、右側に集中しているとの報告があり、非常に興味深い事例であった。

幕府の記録の中にも、乱鎮圧後わずか2日後に石垣を壊し始めている様子が伺え、一揆勢の遺体は早い時期に埋められたことが伺える。

幕府軍は、一揆後の現地処理の時、周りに散乱する一揆軍の遺体を集め、石垣の下や門の空間に投げ込み、石垣の石材である巨石を上から壊して落とし、さらに土で覆い埋め尽くしたと思われる。幕府軍は籠城した一揆軍やキリシタンに対し、かなりの憎しみや恐怖感があったのではないか、それを封じ込めるかのように、原城本丸を封印した。原城本丸はまさしく巨大な墓ともいえる。この骨の出土は、乱の悲惨さをあらためて再認識させられた。

おわりに

発掘調査によって検出した虎口遺構や石垣遺構、キリシタン関係遺物などは「原城」の姿を現しただけでなく、「島原・天草一揆」を考察するうえでかなり貴重な資料となった。

検出した石垣や虎口の崩壊状況から、各門跡における破壊の相違は単に軍事的機能の停止や象徴的な部分の破壊ということとは別に、キリシタンの封印という「島原・天草一揆」の持つ特別な意味での破壊が存在すると思われる。

出土したキリシタン遺物は、16世紀後半から17世紀初頭にかけて、イエズス会によってわが国に到達、あるいはその影響下で製作されたものであると思われるが、それぞれの時代的区分や特徴は把握されていないのが現状である。しかし、近年の調査で出土事例が報告され、考古学的、美術史学的、科学的観点から次第に明らかになってきている。さらなる出土事例を期待し比較検証を行い、キリスト教の布教の実態など含め、総合的な解明ができると思われる。

原城の調査は現在本丸地区だけに限られ、二の丸、三の丸やそれぞれの曲輪に付随する各虎口などに関しては三の丸地区の大手門調査に取り掛かったところである。今後それらの調査による成果の検討によって新たな展開ができるだろう。また、隣接する有馬氏の本城である日野江城の調査をふまえ、この両城を比較し近隣の地域を含め総合的にみることによって、16世紀後半から17世紀初頭キリスト教界が栄え島原・天草一揆で終焉を迎えた有馬の地が、いかに日本史上で重要な役割を果たしていたのかその実態が解明できると思われる。

【註】

(1) 井藤暁子「キリシタン数珠ロザリオの我が国における態様」『研究調査報告』第4集　54頁　(財)大阪府文財センター　2006年
(2) 結城了悟「キリシタン遺物の謎」『キリシタン文化研究会報』105号　4頁　1995年
(3) 今野春樹「キリシタン考古学の可能性」『キリシタン大名の考古学』九州考古学会　夏季(大分)大会発表資料82頁　2007年
(4) 今野春樹「無原罪の聖母の分類について」フェスタ南蛮　発表資料　12頁　2008年
(5) 浅野ひとみ「キリシタン時代の図像受容」フェスタ南蛮　発表資料　5,6頁　2008年
(6) 五野井隆史　「有馬晴信の新城経営と原城について」『キリシタン文化研究会報』205頁　1980年
(7) 大野安生「大村城下のキリシタン関係遺跡調査の現状」『16・17世紀初頭におけるキリスト教の布教とキリシタン墓』　長崎県考古学会　2007年度大会　研究発表要旨　39頁　2008年
(8) 宮下雅史「花十字紋瓦考」『西海考古』第5号　54～57頁　西海考古同人会　2003年

【参考文献】

鹿児島市教育委員会『鹿児島(鶴丸)城二之丸跡G地点－宗教道場の建設に伴う緊急発掘調査報告－』鹿児島市埋蔵文化財発掘踏査報告書　28集(2000年)
東京国立博物館『東京国立博物館図版目録　キリシタン関係遺品篇』(2001年)
南有馬町教育委員会『原城跡』南有馬町文化財調査報告書 第2集(1996年)
南有馬町教育委員会『原城跡Ⅱ』南有馬町文化財調査報告書 第3集(2004年)
南有馬町教育委員会『原城跡Ⅲ』南有馬町文化財調査報告書 第4集(2006年)
南島原市教育委員会『原城跡Ⅳ』南島原市文化財調査報告書 第4集(2010年)

「天草・島原の乱手負討死一件」にみる原城攻防と藩認識

西南学院大学博物館　学芸員
安髙　啓明

はじめに

島原・天草一揆(島原の乱)は、幕府がキリスト教の信仰そのものを禁ずるきっかけとなり、鎮圧の翌年には五次にもわたった寛永鎖国令が完成する契機となった一大事件である。国是を明確にした、歴史事象にもかかわらず、体制側の資料の現存が多く、一揆側の資料が少ないことから、双方の視点からみた一揆の実相は不透明なことが多い。

本稿で取り上げる「天草・島原の乱手負討死一件」は、原城攻めに参加した秋月藩家臣が所持していたものである。詳しくは後述するが、本資料も鎮圧した側の資料である。そこには、他の書誌との共通点や相違点がみられる。そのため、この資料は原城の攻防の真実というよりも後世のために記録されたものである。このような、実際に鎮圧に参加した藩による記録というのは何を意味するのか。本稿ではそこで示される資料の翻刻を通じて、秋月藩における島原・天草一揆観を見出していきたい。

1. 資料解題

「天草・島原の乱手負討死一件」は、天草市立天草キリシタン館が所蔵する資料である。これは島原・天草一揆も終盤を迎えた寛永15年2月下旬の攻防の様子を記す内容となっている。

2月21日の夜(22日とも)に一揆軍は黒田陣や鍋島陣、寺沢陣に夜襲を仕掛ける。この頃、原城内は食糧が欠乏していたとされ、これには三千人が参加したとある。その夜討ちをおこなった一揆勢の人数配分が記されている。また、2月27日と28日の両日に原城攻め(いわゆる総攻撃)が始まるが、これにあたり各陣営が負傷した人数、討死した人数を収めている。

この資料は「筑前秋月藩主黒田甲斐守家臣馬廻鉄砲頭畑原左衛門政次」が所持していたものを写したようである。黒田甲斐守とは長興[生没年：慶長15年～寛文5年、藩主就任年：元和9年～寛文5年]のことである。黒田長興も原城へ出陣しており、その家臣として畑原左衛門政次も従軍したのであろう。畑原政次が務める馬廻という役職は100石以上の知行があり、家老・中老・御用役・御納戸頭・奥頭取・馬廻頭・無足頭・御物頭・御組外頭・目付頭・作事奉行・長柄頭・勘定所奉行・町奉行・郡奉行などの要職を担当していた。島原・天草一揆の鎮圧にあたり、畑原政次は鉄砲頭として参加している。実際に、原城攻めに参加した者、かつ秋月藩の要職者により記されたものという点からも興味深い資料のひとつといえる。

本資料をおさめる箱裏書には「右十一代子孫為人誌之」とある。これにより本資料は後世に伝えるために作成されたものであることは明らかである。

なお、本論からは紙幅の都合上、割愛したが、「大名衣馬験」という項目がある。細川越中守・細川肥後守・松平右衛門佐・黒田甲斐守・黒田東市正・鍋嶋信濃守・鍋嶋紀伊守・鍋嶋甲斐守・有馬玄番頭・有馬兵部・立花飛騨守・立花左近・小笠原右近・小笠原信濃守・小笠原因幡守・松平丹波守・寺沢兵庫・戸田左門・戸田淡路守・戸田三郎助・有馬左衛門佐・松倉長門守・松倉右近・松倉主水・榊原飛騨・石谷十蔵・馬場三郎左衛門・井上筑後・井上清兵衛・松平伊豆守・林丹波守・松平甲斐守・牧伝蔵・水野日向守を記している(原文通り)。黒田甲斐守のものだけを記しておくと「大馬験黄吹貫小旗折掛中白上二藩トモエ一金尾花　家中ノ指物エツル　黒田甲斐守殿」とある。

2. 資料翻刻

本資料の翻刻は原則として原文通りとし、旧字体についてもそのまま記した。地名の名称などに誤記がみられるものについても同様に表記することとした。なお表装裏面には「嶋原ノ付立」と紙が貼付されている。

寛永拾五年
寅ノ二月廿一日夜討一揆
人数三千人之内
千四百　　松平右衛門佐殿　儀右衛門忠兵衛掛ル
三百拾人　　鍋島信濃守殿　五郎左衛門源左衛門大将
千人　勢摟ニ　御同人
弐百九拾人　寺沢兵庫頭殿
　　松平右衛門佐殿へ掛ル
同二月廿七日八日城乗崩時手負討死之付立
一細川越中守殿家中
　手負千八百弐拾壱人
　討死弐百四拾六人
　二口合弐千六拾七人
一松平右衛門佐殿家中
　手負千弐百拾三人
　討死弐百拾三人
　二口合千四百弐拾六人
一黒田甲斐守殿家中
　手負三百四拾五人
　討死三拾弐人
　二口三百七拾七人
一黒田東市正殿家中
　手負百五拾六人
　討死拾六人
　二口合百七拾弐人
一鍋島信濃守殿家中
　手負六百八拾三人
　討死百拾六人
　二口合七百九拾九人
一有馬玄番頭家中
　手負百八拾五人
　討死七拾八人
　二口合弐百六拾三人
一立花飛騨守殿家中
　手負三百七拾九人
　討死百弐拾七人
　二口合五百六人
一松倉長門守殿家中
　手負九拾七人
　討死弐拾壱人
　二口合百拾七人
一小笠原右近大夫殿家中
　手負弐百三人
　討死弐拾五人
　二口合弐百弐拾八人
一小笠原信濃守殿家中
　手負百四拾八人
　討死拾九人
　二口合百六拾七人
一松平丹後守殿家中
　手負弐拾七人
　討死三拾壱人
　二口合五拾八人
一水野日向守殿家中
　手負三百八拾弐人
　討死百六人
　二口合四百八拾八人
一有馬左衛門佐家中
　手負三百八人
　討死三拾九人
　二口合三百四拾七人
一寺沢兵庫頭殿家中
　手負三百拾五人
　討死弐拾三人
　二口合三百三拾八人
一戸田左門殿家中
　手負三拾四人
　討死四人
　二口合三拾八人
一松平伊豆守殿家中
　手負百四人
　討死六人
　二口合百拾人
手負都合六千九百六拾人
討死都合千百三拾人
惣都合八千九拾七人

「大名衣馬験」（中略）

上総村	助右衛門	有馬	市右衛門
	惣兵衛		長助
	三平		久右衛門
ふか江村	甚右衛門	木庭村	久兵衛
	作十郎		角介
			作右衛門
有家村	久兵衛	小川村	吉蔵
	甚右衛門		弥七右衛門
	清七		
三會村	仁右衛門	水岩村	五郎左衛門
	六右衛門		大蔵
櫛山村	多兵衛	小濵村	久兵衛
	惣右衛門		二郎兵衛
口津村	次兵衛	口津浦村	七右衛門
	長右衛門		市郎兵衛
	甚右衛門		
	善吉		
大矢野村	七左衛門		
	右衛門作		

八百之大将

軍奉行	休意
	芦塚忠兵衛
	松崎半之丞
天草	儀右衛門
	源右衛門
二ノ丸	千三百人
本丸	五百人　重ル
城中人数	三萬七千人

3. 人物と人数の比較

本資料は27日・28日の攻防による被害人数を詳細に記述しており、陣営ごとに負傷者と死者の実数を記している。この人数表記については「島原記」(死者1,130人・負傷者6,960人)のものと合致している。

また、肥前島原に寓居していた村井昌弘は『耶蘇天誅記』という体制側からみた資料を残している。ここで登場する名前と本資料の共通点も見出すことができる。例えば「ふか江村」(深江村)甚右衛門(庄屋)や有家村の甚右衛門(庄屋)、有馬村(北有馬)長助(庄屋)などはその一例である。中略以降にある村下の名前の表記は、各村の庄屋格の者をあらわしていると思われる。「天草・島原の乱手負討死一件」が無為に作成されたものではないことも裏付けられる。

一揆軍の勢力の推移は『耶蘇天誅記』のなかでも記されている。寛永14年10月28日には島原半島で八千余人の勢力が、11月2日には一万三千余人、そして11月4日には一万八千余人と膨れ上がっている。10月28日は島原一揆勢が原城に籠ったときであり、29日に天草の大矢野で一揆がおこっている。10月15日に加津佐の寿庵から立ち帰りを促す廻文が出ていて結束を深めていた島原半島の動向を受けて、天草でも蜂起がおこった。結果的に11月末から12月3日に天草四郎時貞が島原に入るまでの間に、天草から原城に移動して籠城した人数は相当数にふくれあがっていた。

原城に籠城した人数については諸説あることは周知の通りであろう。例えば、金井俊行の「稿本島原耶蘇乱記」によれば、籠城者数は二万七千七百五十四人としている。また、原城攻めに参加した肥前国小城藩鍋島元茂は、城内の守備兵は二万三千人、非戦闘要員の女性や子供が一万四千人余りとし、籠城者の総計は三万七千人と見積もっている。同じく原城攻めに参加した細川忠利が記した「細川忠利文書」(東京大学史料編纂所蔵)でも、城内では三万七千人の犠牲者があったとされている。本資料でも「城中人数三萬七千人」とあることから、島原・天草一揆に参加したほかの武将たちと同じ人数で秋月藩も認識していたことがわかる。

なお、本資料の作者の所属する秋月藩の手負討死の人数も記されている。黒田甲斐守の家中のうち、手負は345名、討死は32名、総数は377名だった。他の陣営と同列手記されていることから、秋月藩寄りの表記ではないことは明らかである。あくまでも鎮圧に参加した藩のひとつと意識して作成されたのである。

おわりに

秋月藩主黒田長興は原城攻めに参加している。秋月はキリシタンだった秋月城代黒田直之はもとより、それまでもキリスト教とゆかりのある土地柄だった。いち早く棄教した黒田長政は、直之の死後、自身の三男の長興を秋月に着任させたことは、キリシタンとの関係を絶とうとした姿勢がみられる。原城攻めへの参加もその一貫といえる。

秋月にとっても島原・天草一揆の鎮圧に参加したことは誉れだったのであろう。いわゆる軍功として認識していたものと思われる。本資料の存在もそれを物語るとともに、一揆から200年経ったことを記念して1837年に藩主黒田長元の命により作成され、完成した「島原陣図屏風」はさらにそれを裏付けるものである。

「天草・島原の乱手負討死一件」で島原・天草一揆の実相を知ることは困難であるが、原城攻めに参加した藩が、これをどうとらえていたのかがみえてくる。また、他の諸誌類との共通点や相違点をみることで、編纂過程や書誌分析も可能である。その結果、参加した藩としての名誉を後世に伝えるために、このような記録類を残したのである。

■出品目録

	資料名	英訳	数量	所蔵
序章．キリシタン時代の諸相				
1	肥前国慶長国絵図	Map of Hizen Province	1	松浦史料博物館
Ⅰ．信仰の足跡				
Ⅰ-1祈りの証				
2	府内病院想定復元模型（複製）	Miniature of Funai Hospital	1	大分県立歴史博物館
3	メダリオン	Medal	1	天草市立天草キリシタン館
4	メダイ（府内型）	Medal	5	大分県教育庁埋蔵文化財センター
5	メダイ	Medal	1	大分県教育庁埋蔵文化財センター
6	メダイ	Medal	1	天草市立天草ロザリオ館
7	メダイ	Medal	2	福岡市埋蔵文化財センター
8	メダイ鋳型	Mold of medal	1	福岡市埋蔵文化財センター
9	メダイ	Medal	1	北九州市教育委員会
10	コンタ	Contas［Rosary］	2	大分県教育庁埋蔵文化財センター
11	コンタ	Contas［Rosary］	1	久留米市埋蔵文化財センター
12	クルスの掛鎖	Cross chain	1	大分県教育庁埋蔵文化財センター
13	指輪	Ring	2	南島原市教育委員会
14	指輪	Ring	1	大分県教育庁埋蔵文化財センター
Ⅰ-2意匠に込めたもの				
15	花十字紋瓦	Roof tile with "flower cross" design	1	南島原市教育委員会
16	罪標付き十字架浮文軒丸瓦（秋月城）	Eave-end roof tile / Round-shaped roof tile with cross design	1	朝倉市教育委員会
17	十字浮文軒平瓦	Eave-end roof tile / Round-shaped roof tile with cross design	1	久留米市埋蔵文化財センター
Ⅰ-3信仰の果てに				
18	「INRI」銘入り石製十字架	Stone cross with an inscription of "INRI"	1	波佐見町教育委員会
19	石製台付十字架	Cross with stone pedestal	1	唐津市教育委員会
20	【拓本】市万田磨崖十字架碑	Rubbed copy of stone cross	1	個人
21	【拓本】正覚寺キリシタン墓碑群第一号	Rubbed copy of Christian gravestone	1	個人
22	【拓本】吉利支丹墓碑	Rubbed copy of Christian gravestone	1	個人
22’	吉利支丹墓碑（レプリカ）	Gravestone of Christian（Replica）	1	南島原市教育委員会
Ⅱ．島原・天草一揆の痕跡				
Ⅱ-1伝えられる戦況				
23	原城攻囲陣営並城中図	Encirclement of Hara Castle	1	松浦史料博物館
24	天草筒	*Amakusa-dutsu* ［Gun barrel］	1	天草市立天草キリシタン館
25	砲弾	Bullets	7	南島原市教育委員会
26	天草・島原の乱手負討死一件	Records of Amakusa-Shimabara Rebellion	1	天草市立天草キリシタン館
27	筑紫薙刀	*Chikushi-naginata* ［Hatchet sword］	1	天草市立天草キリシタン館
28	原城紀事	Records of Hara Castle	1	西南学院大学博物館
Ⅱ-2戦場の跡から				
29	十字架（青銅製）	Cross	1	南島原市教育委員会
30	十字架（函）	Cross	1	南島原市教育委員会
31	十字架（鉛）	Cross	1	南島原市教育委員会
32	ロザリオの珠	Rosary	2	南島原市教育委員会
33	メダイ（表：ザビエル）	Medal	1	南島原市教育委員会
34	メダイ（表：キリスト）	Medal	1	南島原市教育委員会
35	メダイ	Medal	1	南島原市教育委員会

	資料名	英訳	数量	所蔵
Ⅲ. 途絶えなかった祈り				
36	潮かくしクルス	Cross hidden in the tide	1	天草市立天草キリシタン館
37	隠し十字仏	Image of Buddha carved with cross	1	天草市立天草キリシタン館
38	マリア観音像	Mary *Kannon*	1	西南学院大学博物館
39	キリシタン魔鏡	Magic mirror	1	西南学院大学博物館
Ⅳ. 海外交易の姿				
Ⅳ-1博多の交流				
40	中国・瑠璃釉小壷（博多90次）	Small pot	1	福岡市埋蔵文化財センター
41	タイ・白釉鉄絵皿（博多85次）	White glaze with iron	1	福岡市埋蔵文化財センター
42	中国・龍泉窯系青磁碗（博多築港線3次）	Celadon of Longquan	1	福岡市埋蔵文化財センター
43	中国・景徳鎮青白磁筆架（博多139次）	Jingdzhen blue-white porcelain	1	福岡市埋蔵文化財センター
44	朝鮮王朝・褐釉陶器瓶（博多124次）	Brown glazed bottle	1	福岡市埋蔵文化財センター
45	高麗～朝鮮王朝・象嵌粉青沙器鉢（博多35次）	Buncheong ware bowl with inlaid inscription	1	福岡市埋蔵文化財センター
46	ベトナム・青花皿（博多172次）	Vietnamese Blue-and-white	1	福岡市埋蔵文化財センター
Ⅳ-2天草の交流				
47	石製印鑑（本渡城跡）	Stone seal	1	天草市立天草キリシタン館
48	ベトナム産青花（棚底城跡）	Vietnamese Blue-and-white	1	天草市教育委員会
49	磁州窯系鉄絵壷片（河内浦城跡）	Cizhou iron glaze	1	天草市立天草コレジヨ館
50	ベトナム産鉄絵大盤（河内浦城跡）	Viietnamese underglaze plate with iron brushwork	1	天草市立天草コレジヨ館
51	華南三彩角瓶（三川城跡）	Color glazed square bottle of southern China	1	天草市教育委員会
52	緑地金襴手碗片（三川城跡）	Gold-painted green base porcelain	1	天草市教育委員会
53	五色大皿（三川城跡）	Five-colored plate	1	天草市教育委員会
Ⅳ-3大分の交流				
54	華南三彩ー神像形置物	Color glazed of southern China	1	大分県教育庁埋蔵文化財センター
55	華南三彩ー駱駝形水滴	Color glazed of southern China	1	大分県教育庁埋蔵文化財センター
56	華南三彩ー魚形水滴	Color glazed of southern China	1	大分県教育庁埋蔵文化財センター
57	華南三彩ー馬形水滴	Color glazed of southern China	1	大分県教育庁埋蔵文化財センター
58	華南三彩ー鳥形水滴	Color glazed of southern China	1	大分県教育庁埋蔵文化財センター
59	ミャンマー製黒釉陶器壷	Black glazed of Myanmar	1	大分県教育庁埋蔵文化財センター
60	タイ製臼（クロッ）	Thai mortar	1	大分県教育庁埋蔵文化財センター
61	ベトナム産白磁印花文碗	Vietnamese white porcelain	1	大分県教育庁埋蔵文化財センター
Ⅳ-4島原の交流				
62	法花（日野江城跡）	Chinese clolored porcelain *Hoka*	2	南島原市教育委員会
63	法花（日野江城跡）	Chinese clolored porcelain *Hoka*	2	南島原市教育委員会

西南学院大学博物館2012年度秋季特別展

キリシタン考古学の世界

— 今日に甦る祈りとさげび —

編　　集　安髙啓明
編集補助　貞清世里　高橋幸作　中尾祐太
　　阿比留由佳　稲益あゆみ　吉松由希
英文翻訳　中松沙織
発　　行　西南学院大学博物館
　　〒814−8511　福岡市早良区西新3丁目13番1号
発 行 日　2012（平成24）年10月19日
印　　刷　株式会社 インテックス福岡

西南学院大学博物館

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY MUSEUM

URL www.seinan-gu.ac.jp/museum/

西南学院大学

一粒の麦から、
次の100年に向かって

100 Thanks and Next!